

# わたしのトマス・アキナス頌

## 第一章 その生涯

西 藤 洋

### はじめに

婦人よ、喜びなさい。あなたがみごもっておられる赤子は男の子で、あなたはその子をトマスと名づけられるでしょう。そして、あなたと御主人はその子をモンテ・カシーノの修道士にしたいと望まれるかもしれません。けれども神は、[その子に] 別の生き方をお定めになるでしょう。というのも、その子は説教者修道会の修道士となる、しかも、学識と聖性において世にならぶ者のない修道士になるでしょうから。

一二二五年、あるいはその翌年、もしくは翌々年のある日、ナポリとローマのなかほどの街アキノに近い山城ロッカ・セッカをボヌス（善き人）と名乗る隠遁修道士が訪れ、城主ランドルフォの妻テオドラにこのように告げたという<sup>1</sup>。ここでモンテ・カシーノと呼ばれているのは、修道院制の基礎を築いたとされる聖ベネディクトが六世紀前半に自ら、建設したとされる修道院、しかも、後に聖ベネディクトの遺体が安置されたという由緒ある大修道院である。この隠遁修道士は、つまり、トマスと名づけられるであろう男の子は、両親の望むようにいく世紀も前に創建された伝統ある観想修道会、ベネディクト会の修道士とはならず、まだ歴史の浅い托鉢修道会の一つ説教修者道会の、すなわちドミニコ会の修道士となる、しかし学識と聖性においては比肩する者のないひとになるであろうと告げたのである。これに対してテオドラは、

そのような子の母となる値打ちは、わたしにはありませんが、どうぞ神様のお望みのままになりますように

と答えたという<sup>2</sup>。そして、この隠遁修道士の告げたとおりに生まれ、名づけられた男の子はやがて、その言葉のように「世にならぶ者のない」ほどに卓越した学僧となった。トマス・

<sup>1</sup> Foster (1959), P. 100. □ 内、筆者。隠遁修道士が告げたとされるこの言葉は、稲垣 (1992), 13~14頁にも紹介されている。

<sup>2</sup> 稲垣 (1992), 14頁。

アクィナスである。

このような応答のあったことが今日に語り継がれているのは、テオドラの孫娘のひとり、したがってトマスには姪にあたるカタリナが、かつて祖母から聞かされた話としてトマスと同時代のひと、トッコのギレルムスに伝え、それがそのギレルムスによって列聖調査の場で証言されたからである。すなわち、一三一九年七月から九月にかけて、トマスが聖人の列にくわえるにふさわしいひとであったか否かを判断するためにナポリで開かれた聴き取り調査の場において証言されたからである。

さて、わたしは、以前からつづけてきたわたしなりの勉強の成果をこの四、五年の間に二冊の書物にまとめあげることができたが、それらのいずれについても、トマス・アクィナスの説くところによりながら論を立てた部分がすくなくない<sup>3</sup>。トマスに多くを負ってきたのである。そのようにトマスによりながら論を進めるなかでわたしはまた、トマスのふところの深さとおおらかさに感銘をうけることが度々、あった。論理の破綻を一切、許さぬ仕方で構築され、それゆえ、ひとに近寄りたいたいと感じさせるほどに牢固とした佇まいをもつスコラ学、トマスはその大成者である。そのような学僧でありながら、ひとというものみときのトマスはどうしてふところが深い。完徳ではなく、とかく罪を犯しがちなわたし達をそのままにみつめ、包みこむことのできるひとであったと思われるのである。

また、いく人もの教父達の説いたところに真摯に向き合いながら、しかし、それらの権威に膝を屈し、呪縛されることはない。むしろ、闊達に、おおらかに自らの見解を表明している。グループマンも語るように「トマス・アクィナスは、古陋なる軌條を辿り、廃残の想痕に追従して、やうやく職権を行使し得る如き教授ではなかった」といってよいであろう<sup>4</sup>。わたしにとってトマスはそのような存在であり、そのようなトマスに敬服しているのである。

それゆえ、二冊の書物を書き上げながら、わたしのなかで、トマスのふところの深さとおおらかさを描いてみたいという思いがこみあげてきた。もとよりそれは無謀なことである。なによりもまず、トマスの巨大な知的構築物のうち、わたしの触れることができたのは、その、ほんの一部でしかないのだから。くわえて、西欧中世においてたゆむことなくつづけられた知的営為の産物であるキリスト教神学や哲学について、つまりスコラ学について体系的に勉強したこともないのだから。しかし、一度、こみあげてきた思いはつるばかりで、それをしずめることはできなかった。そうであればもうさほどながくはつづけられないであろう学問する日々、それをトマスのふところの深さとおおらかさを描くことで過ごしてみようと思う。無謀であることは承知しながら。

<sup>3</sup> 西藤 (2012), (2015)。

<sup>4</sup> グラープマン (1977), 9頁。

そこでまず、トマスの生涯をたどってみたい（本章）。

おおまかなくくりでいえば同時代人といってよいひと達のなかに、トマスに評伝を寄せたひとが三人いる。トッコのギレルムス、グイのベルナルドゥス、そしてカロのペトルスの三人であり、いずれもドミニコ会の修道士である。三人のうちトッコのギレルムスは評伝を寄せただけでなく、つい今ほども触れたトマスの姪、カタリナを訪ねるなどして、列聖調査のための証言を集め、調査を推進させる役割も担ったといわれる。そして、自身も数多くの証言を述べているので、トマスとの間にどのような接点があったか、ひとこと付言しておきたい。

一二五〇年よりすこし前に生まれたトッコのギレルムスは、一二七二年、ドミニコ会の要請にもとづいてトマスがナポリに神学校を設立したとき、聴講した学生のひとりであった。そこでギレルムスは神学を講じ、説教をするトマスを目の当たりにし、言葉を交わすこともあったという。また、リヨンで開かれることになっていた公会議に教皇グレゴリウスX世の命にしたがって出席すべく一二七四年二月、ナポリを出立したトマスと、途中から同行したとされる。ナポリを出てからいくらか経たない翌三月、病にたおれ、トマスが最後のときを迎えた旅である。このようにトッコのギレルムスは、トマスとじかに接する機会を何度ももちえたとみられる。

トッコのギレルムスには、さらに、他界したトマスを見送った後、ナポリに滞在していたピペルノのレギナルドゥスとも言葉を交わす機会があり、トマスに寄せた評伝と列聖調査の場における証言は多く、そのときの会話によっているという。そしてこのピペルノのレギナルドゥスは、最初のパリ大学神学部教授職を後任に譲ってイタリアに帰った一二五九年頃から亡くなるまでの二五年ほどの間、いつもすぐ近くであって、朋輩として、あるいは世話役 (*socius*) として献身的にトマスを支えたひとである。判読不能といわれるほどに悪筆であったトマスの手稿を浄書する作業、また、口述されたトマスの論考を書き取る作業も、このひとの手でなされた部分がすくなくないといわれる。そのうえ、ピペルノのレギナルドゥスはトマスの聴罪司祭でもあった。つまり、トマスはこのひとに罪の告解をしたのだという。トマスの生き様を知るうえで、このピペルノのレギナルドゥス以上にたしかな証人はどこにもいないといってよい。

トッコのギレルムスの評伝や証言は、それゆえ、潤色された部分がすくなくないにせよ、トマスの生涯について、あるいはさまざまな場面におけるトマスの様子について、ピペルノのレギナルドゥスをはじめとするトマスゆかりの人びとがそれぞれの眼でみたことを、あるいは聞きおよんだことを伝える貴重な史料のひとつであるのはまちがいない。

また、列聖調査の場でトッコのギレルムスと同じように数多くの証言を寄せたひとに、カプアのバルトロメウスがいる。法にあかるく、シチリア王国の高官となったひとであるが、

まだ若く、ナポリ大学の学生であったとき、いく人ものドミニコ会修道士からトマスのひとりについて話しを聞く機会をもったという。とりわけ、十代後半にさしかかったころのトマスにさまざまに語りかけ、ドミニコ会入りへと導いたとされるサン・ジュリアーノのヨハネス神父から話しを聞く機会があったという。カプアのパルトロメウスには、また、トッコのギレルムスと同様に、トマス亡き後、ナポリに滞在していたピペルノのレギナルドゥスと言葉を交わす機会もあったとみられる。

以下、本章では、こうした同時代人の評伝や列聖調査の場における証言が数多く収録されているフォスターの書物によりながら、また、現代の研究者グラープマン、ヴァルツ、稲垣の手になる行き届いた案内に導かれながら、さらにはチェスタトンの熱っぽい評伝にもおりにふれて眼を留めながら、トマスの生涯をたどってみたい<sup>5</sup>。いくつもの論争や対立抗争の渦中に置かれながら、しかし、ひたすら神と世界についての観想と思索に捧げられた、その、五十年にもみたくない、しかし、途方もなく密度の濃かった生涯を。

ついで、世界についてなにかを知ろうとするとき、ひとに具わっている知性がなにをどこまで照らし出しているかについて表明された見解に、また、世界の永遠性をめぐって記された論考に、わけても、世界に時間的な始まりのあったことをひとは論証しうるかという問に答えて記された論考に分け入り、筆者の理解を述べてみたい(次章以降)。それらが、トマスの巨大な知的構築物の根幹をなすものといつてよいかどうか、それは、分からない。けれども、筆者が感服するトマスのふところの深さとおおらかさがよく現れている見解であり、論考であること、それはまちがいないと思われる。

なお以下では、とくに本章では、筆者が参照した書物や論文の標題と著者名を本文に逐一、明記し、それぞれについて参照箇所を註記することはしない。そのようにすると、かえって読みにくくなることをおそれるからである。ただし、直接、引用した箇所については、ひとつひとつ註記する。

## 一 父と母、そして偉丈夫トマス

トマスが生まれたのはいつであったか、はっきりとは分からない。亡くなった一二七四年、トマスは四九歳であったというトッコのギレルムスの証言にしたがえば、生まれたのは一二二五年ということになる。けれども、翌二六年、あるいは二七年であったとみるひとつもいるという。

これに対して、トマスが生まれたのがロッカ・セッカ(乾いた岩)とよばれる山城においてであったこと、それは間違いないとみられている。すこし前にも述べたように、ナポリと

<sup>5</sup> Foster (1959), グラープマン (1977), Walz (1951), 稲垣 (1992), チェスタトン (1976)。

ローマのなかほどの街アクィノの近くに築かれた山城である。父ランドルフォは、神聖ローマ帝国皇帝であり、シチリア王国の国王でもあったフリードリッヒ二世につき従った騎士のひとりであった。稲垣にしたがっていえば、それも、凡庸な騎士ではなく、この山城と一族を、「数々の危機をきりぬけて守りぬいた〔優れた〕武将」であった<sup>6</sup>。おそらくは武力ばかりでなく外交の術も尽くして。

母テオドラはナポリの出。高貴な家に生まれたひとだという。やはり、稲垣にしたがっていえば、一二四三年頃から一二五五年頃までの間、つまり、夫ランドルフォが他界した後、自身が没するまでの間、「アクィノ家の柱として采配をふるった〔ひと〕、そして、その行動ぶりからすると勇猛な気性の女性」であったらしい<sup>7</sup>。

そのようなテオドラは、また、多く子供達に恵まれた。七人の男の子とすくなくとも四人、もしかすると五人もの女の子を夫ランドルフォとの間にもうけたのである。トマスは七人の男兄弟の末っ子であった。そして冒頭に紹介したトマスの出生にまつわる逸話をトッコのギレルムスに伝えたこととされるカタリナは、サン・セヴェリーノのギレルムスに嫁いだ姉、マリアの娘である。

さて、つい先ほど、わたしは、ロッカ・セッカの山城と一族を守りぬくために、ランドルフォは、おそらく、武力だけでなく、外交の術も尽くしたであろうと述べたが、それには訳がある。ローマ教皇領と神聖ローマ帝国皇帝の統治下にあったシチリア王国が境を接するところに、つまり、多年、対立抗争を繰り返してきたローマ教皇と神聖ローマ帝国皇帝それぞれの勢力がぶつかり合うその場所にアクィノの街、そしてロッカ・セッカは位置していたからである。教皇派と皇帝派のせめぎ合いのまっただ中に位置していたからといってもよい。それゆえ、どちらか一方につき従いながら、しかし、なにほどこかの距離は保ち、他方との修復不能な対決は避けるという慎重な振る舞い方が、あるいは巧みな外交が一族の存続のために必要であったとみられるのである。

実際、父ランドルフォも兄達もそのように振る舞っていたにちがいない。けれどもそれでもなお、両派の抗争は一族につらい犠牲を強いることがあった。後に六人の兄のうちアイモーネとレジナルドは教皇に近づいたが、そのひとり、レジナルドは皇帝フリードリッヒ二世の命によって処刑されてしまう。一二四八年、皇帝の暗殺を謀ったからだとされる。ヴァルツによれば、このことを知ったトマスは「正義のひとかけらもない」とつぶやき、嘆いたと

<sup>6</sup> 稲垣(1992), 12頁。□内、筆者。なお、ランドルフォはフリードリッヒ二世の下で〈労働の地の領主判事〉に任じられていたという。けれども、この官位がどのような権能をもつものであったか、それは分からない。また、グラーブマンやチェスタンのように、ランドルフォは爵位(アクィノ伯)を有していたと述べるひともいるが、それは、一族の別の人物と混同した誤りだとされる。Walz (1951), P. 3, 稲垣前掲書同頁。

<sup>7</sup> 稲垣 (1992), 13頁。□内、筆者。

いう<sup>8</sup>。

なお、トマスの姉妹のひとり、まだ幼いころ、雷に打たれて亡くなったのだとされる。そして、トマスに評伝を寄せた三人のドミニコ会修道士のひとり、ガイのベルナルドゥスが伝えるところによれば、身の丈の高い偉丈夫であり、また、その力を神にたのむおのれの魂によって、どのようなおそろしいことや痛みにもひるむことのなかったトマスであるが、雷だけは別でひどくおびえ、雷鳴の激しいときには十字を切って「神はひととなってわれわれのもとにくんだり、われわれのために死に、そして、よみがえり給うた」と唱えたという<sup>9</sup>。このように唱えればわが身は守られると信じているかのように。もっともこのことが、姉妹のひとりを見舞った災いのせいであったかどうか、それはわからない。

その風貌に触れたので、もう一言つけくわえれば、トマスは、身の丈が高いだけでなく太っていたともいわれる。それも、並大抵でなく太っていたので、チェスタトンによれば、トマスの座る食卓はその大きなお腹に合わせて「半月形にくりぬかれていた」という<sup>10</sup>。これは、ただし、自身も大兵肥満であったチェスタトンが言いふらしたホラ話してしかないのかもしれない。

## 二 モンテ・カシーノと修道志願児童トマス

トマスの時代、貴族や騎士など身分の高い人びとの間では男の子を、とくに末の男の子を修道院に預けることがひろく行なわれたという。〈修道志願児童<sup>オブラートゥス</sup>〉として預け、ラテン語の読み書き、算術、音楽などの手ほどきを受けさせる。聖書を、また、さまざまの典礼において用いられる祈禱書を手に取り、それらを読むための手ほどきも受けさせた。そして、トマスもそのとおり、ある修道院に預けられた。

預けられたのは冒頭でも触れたベネディクト会の修道院、モンテ・カシーノ。ロッカ・セツカから南にすこし離れたところに、六世紀前半にベネディクト会の創始者聖ベネディクト自身の手で築かれた由緒ある大修道院である。山城であるロッカ・セツカと同様に小高い丘の上に築かれているという。そこにトマスは、一二三一年から三九一年ごろまで〈修道志願児童〉として預けられた。五、六歳から十三、四歳ころまでをこの修道院で過ごしたのである。

もっとも、一口に〈修道志願児童<sup>オブラートゥス</sup>〉といっても、親が修道士にさせたいと考えて託した児童、ヴァルツの言葉でいえば“real oblate”ばかりではなかったという。単に一時期、子供を預

<sup>8</sup> Walz (1951), P. 40.

<sup>9</sup> Foster (1959), P. 53. なおこの逸話は稲垣 (1992), 148頁でも紹介されている。また、フォスターによれば、ガイのベルナルドゥスの評伝は装飾的表現が過多と感ぜられるトッコのギレルムスのそれにくらべ、すっきりとしているが、述べられていることの多くは、ギレルムスの評伝によっているとみられるという。Foster *ibid.*, PP. 6~7.

<sup>10</sup> チェスタトン (1976), 292頁。

かってもらおう場として修道院を選ぶということもあったとされるのである。ヴァルツは、ただし、トマスは、“real oblate”として預けられたようだと述べている<sup>11</sup>。チェスタトンも、やがてトマスがこの大修道院の修道士になり、さらには「彼の世俗的身分にみあうような役職」に、つまり院長となることを父ランドルフォは期待していたと述べている<sup>12</sup>。大修道院の院長となれば、その権勢と富の恩恵に一族もあずかることができるからである。けれども、ランドルフォが事実、そのような期待を抱いていたことを伝える証言があるわけではなく、はっきりとしたことはわからない。

ともあれ、トマスが、五、六歳から十三、四歳ころまでをこの修道院で過ごしたのはまちがいない。そして、すでに紹介したように、ラテン語、算術、音楽などを学び、聖書や祈禱書を読むことについて手ほどきを受けた。その際、たとえば、『詩篇』の賛歌がおさめられている祈禱書が読本として用いられたという。なお、授業は何人もの〈修道志願児童〉を一室に集めてなされたのではなく、修道士が個々別々に行なったとされる。

さて、モンテ・カシーノにおけるトマスはどのような様子であったか。

いく人もの同時代人が異口同音に伝えるところによれば、トマスは、口数がすくなく、ひとりであることを好む少年であったらしい。けれども、カロのペトルスによれば、そのように寡黙なトマスであったが、口を開くときまっ教师役の修道士に「神とはなにか」と問うたという<sup>13</sup>。稲垣の述べるように、「神様はどんな御方」で「どこにいらっしゃるか」といった年若いひとなら誰もが思い浮かべるような問ではなく、より根源的な問といってよからうか<sup>14</sup>。そのように何かしら根源的な問に向き合おうとする希求が、あるいは観想への希求がすでに、少年トマスに芽生えていたのかもしれない。また、モンテ・カシーノが築かれている場所とそこから見渡される世界も、生得の資質とあいまって、少年トマスのなかにこのような希求を芽生えさせることにあずかっていたのかもしれない。

モンテ・カシーノ修道院は威圧するようにそびえるカイロ山を北に背にし、東と西にはその名のとおりのカシーノ山をはじめ多くの山々が連なる丘の上に築かれていた。南西に眼を転じるとカンパニア・ディ・ロマーナと呼ばれる土地を、つまり、リリ河とカリグリアーノ河が合流し、その先はチレニア海にまでひろがっている土地を一望にすることができた。「この雄大で静穏な自然の姿……は、幼いトマスの魂に消えることのない印象を刻んだに違いない」と稲垣はいう<sup>15</sup>。ヴァルツはさらに、「山、孤独、そして修道院の沈黙、これらすべてはかれを助けて観想へと導いた。かれはもっとも素朴な事物からもっとも高貴なものへと昇

<sup>11</sup> Walz (1951), P. 9.

<sup>12</sup> チェスタトン (1976), 224頁。

<sup>13</sup> Foster (1959), p. 15.

<sup>14</sup> 稲垣 (1992), 23頁。

<sup>15</sup> 稲垣 (1992), 24頁。

り行くすべを学び、こうして《他の人びとのように惑うことなく神の現存をみてとる》途〔のあること〕を学んだ」と述べている<sup>16</sup>。

そのようなモンテ・カシーノであったが、ローマ教皇と神聖ローマ帝国皇帝の争いにくりかえして翻弄された。そしてそのことが、トマスがこの修道院に留まりつづけることを許さなかったようである。

トマスが預けられるよりすこし前の一二二七年秋、教皇グレゴリウスⅨ世が神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒⅡ世を破門したことに端を発して、争いが激しさを増し、双方の軍勢がぶつかり合うところにあったモンテ・カシーノ修道院もただならぬ状況の下におかれた。この争いは、ただし、一二三〇年、一旦、鎮静化した。父ランドルフォがトマスをモンテ・カシーノに託す決断をしたのも、事態が平穏になったのをみてのことであったにちがいない。

グレゴリウスⅨ世は、しかし、一二三九年、再度、皇帝を破門した。その結果、モンテ・カシーノはふたたび両勢力の争いの只中に置かれ、ついには、皇帝軍の要塞にされてしまったという。皇帝は、さらに、自らの所領出身者以外の聖職者をすべて追放したため、モンテ・カシーノに残ったのは、わずか十名足らずの修道僧だけになったという。〈修道志願児童〉として子供を預けておくにはあまりに荒廃し、かつ、危険なありさまになってしまったのである。

こうしたありさまをみて、この年、父ランドルフォは、トマスをロッカ・セッカに連れ戻した。かりに、トマスがモンテ・カシーノで修道士となり、ゆくゆくは院長となるという期待をもちつづけていたとしても、ひとまずは、連れ戻すほかないと判断したのであろう。こうしてトマスは、生涯を過ごすことになっていたかもしれないモンテ・カシーノを離れた。

なお、以後、二十年以上もの間、モンテ・カシーノに修道院らしい静けさがもどることはなかった。それどころか、いつきは盗賊共の巢窟になっていたともいわれる。いずれにせよ、荒廃した状態がつづいたのである。けれども、トマスは終生、このベネディクト会修道院への敬慕の気持ちを失うことはなかったようである。稲垣によれば、死が間近にせまっていた頃、おそらくは一二七四年初めのある日、トマスは、モンテ・カシーノ修道院の院長であったベルナルドゥス・アイグリエルに宛てて下記のような書き出しの書翰を認めているが、多くの年月をへたそのときにおいてもうつろうことのなかった敬慕の気持ちを伝えようとしてのことであろうという<sup>17</sup>。

神の恩寵によってカシーノの大修道院長であられる、キリストのおける尊父ベルナルドゥス様に、あなたを心からお慕いする息子、常に、そしていずこにおいても従順であることを誓うアキノのト

<sup>16</sup> Walz (1951), P. 16. □ 内、筆者。引用に際しては、稲垣 (1992), 24頁も参照した。

<sup>17</sup> 稲垣 (1992), 18頁。



マス修道士より……。

ヴァルツはまた、トマスは、神に向き合い、「終生、変わるところなくもちつづけられた内観する日々の種子をそこ〔モンテ・カシーノ〕において受け取ったのだ」と述べている<sup>18</sup>。

### 三 ナポリ大学での日々とアリストテレス、そしてドミニコ会との出会い

一二三九年、ロッカ・セッカに連れ戻されたトマスであるが、同じ年の秋、ナポリに移り、以後、五年ほどをナポリ大学に学んだ。そのナポリ大学を創設したのはほかならぬフリードリッヒ二世、ローマ教皇と争うなかでモンテ・カシーノを荒廃させ、トマスをそこから引き離す事態をつくり出した皇帝である。そして、この大学を創設すべく皇帝を動かしたのは、やはり、教皇への敵愾心であったという。父ハインリッヒVI世から帝位を継承するにあたって母方の所領であったシチリア王国を併せて支配することになったフリードリッヒは、統治の実をあげてこの国を教皇に、あるいは教皇の影響下にあった国々に対抗しうる王国にしようとした。そのための手だてのひとつとしてナポリに大学を創設したとされるのである。

シチリア王国内には伝統のある医学校がサレルノにあった。けれども、神学や法学をしっかりと学ぶことのできる大学は存在していなかった。したがって、それらを学ぼうとする若者は国を出るほかない。とりわけ、法を学び、やがては国の統治に寄与すると期待されるような若者が「仇敵ローマ教皇の勢力下にあるポローニア大学」に奪われてしまう<sup>19</sup>。これは、フリードリッヒには我慢できないことであつたらしい。ポローニアは、この時代、いく人もの卓越した法学者を擁する優れた大学であった。

そこでフリードリッヒは一二二四年、ナポリに大学を創設した。人文学部、法学部、神学部、そしてサレルノから移された医学部という四つの学部からなる大学である。教授には王国の外からも優れた学者を招き入れ、ポローニアに、さらにはパリ大学にも比肩されるような大学をつくらうとしたとされる。シチリアの臣民に他の国々ではなく自国で学ぶ機会を開き、そこから王国の統治と繁栄に寄与する人材を輩出させようとしたのである。ポローニアやパリで学んでいる他国の学生を勧誘することも行なわれたという。

こうして創設されたナポリ大学、その人文学部にトマスは籍を置き、以後、一二四四年まで五年ほどの間、勉学にいそしんだ。起居していたのはモンテ・カシーノと同じく、ベネディクト会の聖デメトリウス修道院であったという。そしてこの五年の間に、その生涯を決定的に方向づけた二つの出会いがトマスにあった。ひとつはアリストテレスとの、もうひとつ

<sup>18</sup> Walz (1951), P. 18. [] 内、筆者。

<sup>19</sup> 稲垣 (1992), 28頁。

はドミニコ会との出会いである。

人文学部であれば、学生はまず、自由学芸七科を、つまり、文法、弁証学、修辞学の三科 (*trivium*)、と算術、幾何学、音楽学、天文学の四科 (*quadrivium*) を学ぶことになる。けれども、モンテ・カシーノにおいてそれらをかなりの程度まで習得していたトマスがナポリにあって学んだのは、主として、クルスス、論理学、それに、自然学であったという。ここでクルスス (*cursus*) とは、明解かつ説得的な説話と論述の技法をいう。そしてトマスは、論理学と自然学に触れることをとおしてアリストテレスに出会った。

この頃、パリ大学においては自然学をアリストテレスの、また、註釈者アヴィケンナ、アヴェロエスの著作を用いて教授することは不可とされ、それに背く者は破門されるという禁令がくりかえし、出されていた<sup>20</sup>。これに対してナポリ大学ではかれらの著作によりながら自然学を講じることが、むしろ、奨励されていた。フリードリッヒII世がそのことを強く求めたからだとされる。事実、トレドで多年、翻訳にたずさわってきたミカエル・スコトゥスが、一二二七年頃、フリードリッヒに請われてナポリに移ってきたことで、アリストテレスや註釈者達の著作のラテン語訳をひろく用いて哲学を、わけても自然学を教授することができるようになっていたという。

実際、人文学部の教授のひとりにペトルス・デ・イベルニアがいるが、このひとは、アリストテレスの自然学についてすぐれた学識を有していたという。トッコのギレルムスの評伝によれば、このひとはまた、トマスがその講義を聞いた教授のひとりであったとされる。なるほど、トマスの自然学への関心は、後に師事し、大きな影響を受けたアルベルトゥス・マグヌスほど旺盛ではなかったといわれる。けれども、ナポリ大学で聴講した自然学や論理学の講義をとおして、トマスはアリストテレスに出会ったこと、それはまちがいない。後にトマスがたずさわった途方もない営み、キリスト教神学を無垢のままに保ちながら、しかし、ひとというものについての、そして世界についての了解のなかに、すなわち哲学のなかにアリストテレスの学知をつつみこみ、溶けこませるという営みの端緒が、ここナポリで開かれたこと、それもおそらく、まちがいない。

なお、ナポリにあってトマスの哲学についての理解は日に日に深まり、やがて、他の学生達から講義を反復してほしいと求められるほどになったという。そして、もともと応えてなされたトマスの説明は、教師達の講義を超えて深遠かつ明晰なものであったという。

また、後にもう一度、触れるように、一二七二年、二度目のパリ大学神学部教授職を辞してイタリアに帰ったトマスは、自らナポリの地を選んで立ち上げたドミニコ会の神学校で神

<sup>20</sup> もっとも、稲垣によれば、パリ大学でくりかえし出されていた禁令は、事実上、空文化されていたという。稲垣 (1992), 34頁。

学を講じた。ナポリに神学校を立ち上げたのはローマ管区内に新たな大学、もしくは神学校をつくるというドミニコ会の方針の下、場所の選定を含めて設立にかかわる諸事がトマスに委ねられたからである。その頃、シチリア王国は、フリードリッヒ二世の息子マンフレッドを打ち破ったシャルル・ダンジュー——フランス国王ルイIX世の弟——の統治下にあったが、ナポリ大学を一層、充実させようとしたシャルルは、この神学校をその一部をなすものとみなし、手厚く助成したという。とくに、トマスの講義を支援するため、毎年、黄金一二オンスをドミニコ会に寄進するよう命じたという。

トマスは、かつて学生として学んだ地ナポリに三十年ほどもの歳月をへて立ち帰り、自らの手で立ち上げた神学校でその間の思索の結実を講じたのである。感慨深いものがあったことであろう。

さて、ナポリ大学に在学中、その生涯を方向づけたもうひとつの出会いがトマスに訪れる。すでに述べたようにドミニコ会との出会いである。

街中の雑踏を避けて山中起居し、ひたすら観想に明け暮れる伝統的な修道会とは異なる二つの新たな修道会が十三世紀の欧州に生まれた。〈小さき兄弟修道会〉と〈説教者修道会〉、つまり、フランシスコ会とドミニコ会である。稲垣の言葉を借りて言えば、これら二つの修道会は、「十三世紀における新しい精神運動の担い手であった」。「それは」、すなわち、「イエス・キリストの福音へと立ち帰り、それを宣べ伝えようとする運動」であり、同時に、「キリストの教えの純粹で徹底した実践としての修道生活レリギオを人里離れた山中から、都市のなかに、民衆の間にもたらそうとする試み」であった<sup>21</sup>。この世のもろもろの欲望や葛藤にふりまわされている人びとにけがれのない生き方のあることを教え説き、そのような生き方を、身をもって示すこと、それを二つの修道会は使命としたといってもよからうか。そして、ヴァルツのいうように、こうした使命を果たすべく修道士達は、「かれらが福音を説き伝えようとした民衆の施しにあずかりながら、清貧のうちに生きようとした」<sup>22</sup>。フランシスコ会とドミニコ会が托鉢修道会と呼ばれる所為である。

このようなドミニコ会にトマスは、一二四三年、もしくは一二四四年、〈修道志願者（修練士）〉として受け入れられ、ナポリのドミニコ会修道院長トマゾ・アニ・ダ・レンティニの立会いの下、白の長衣と黒のマントという修道服を身にまとった。十八歳ごろのことである。

さてしかし、なぜ、トマスは修道士になる道を選んだのか、それも、ドミニコ会の修道士となる道を選んだのか。少年期を過ごしたモンテ・カシーノには終生、変わることなく敬慕する気持ちを抱きつづけたとされるのに、修道会入りを志願するのなら、なぜ、ベネディク

<sup>21</sup> 稲垣（1992）、40頁。

<sup>22</sup> Walz（1951）、P. 23.

ト会を選ばなかったのか。生まれてまだ日も浅い托鉢修道会のひとつドミニコ会、そのどのようなところが、トマスのところをとらえたのか。

まず、トマスが、モンテ・カシーノを、あるいは他のベネディクト会修道院を選ばず、むしろ避けたことについては二つの理由があったとみられる。先にも述べたようにこの頃、モンテ・カシーノはひどく荒廃しており、いつになれば修道院にふさわしい平穏さと静けさがとりもどされるか、見通せない状態であったこと、それがひとつである。もちろん、ベネディクト会の修道院はモンテ・カシーノの他にもいくつもあった。けれども、ながい伝統をもつベネディクト会の修道院のどれかに入つたとすると、かつてモンテ・カシーノについてそうであったように、親兄弟はそこで高い位に昇ることを期待するかもしれない。けれども、高い位に昇り、それに付随する権勢と富を手に入れることに、トマスは、まったく執着するところがなく、むしろ、自身が望んで止まない生き方を妨げるものとしておそれ、忌避しつづけた。それがもうひとつの理由である。

ではドミニコ会へとトマスを誘い、動かしたのはなにであったか。

この修道会を立ち上げたスペインのカスティリア出身の聖職者ドミンゴ・デ・グズマン（聖ドミニクス）は、ローマ教皇によって会が認可された年（一二一六年）の翌年、わずか十六名の修道士のうち七名をパリ大学に送り込んだという。このことが示唆するように、修道士達に勉学の機会をあたえることは、それもパリ大学がそうであったように、もっとも高度な水準にあるとされる大学で学ぶ機会をあたえることは、会の創立当初からの基本的な方針であった。キリスト教の教えについて、また、ひとと世界について、深い理解をもっていることは、民衆にイエス・キリストの福音を説き伝えることを使命とする者に、つまり、説教修道士に欠かせないこととされたのであろう。この時代、欧州の各地に現れた異端の教団にその誤りを指摘し、そこに誘いこまれたれた人びとを改心させるためにも必要なこととされたのかもしれない。後にトマスもこのことに深くかかわった。

いずれにせよ創始者のこうした考えは、その後を継いで総長となったサクソニアのジョルダヌスにも受け継がれた。事実、ジョルダヌスは、自ら足を運んでパリ、オックスフォード、ボローニア、そしてパドヴァなどいくつもの大学を訪れ、学生たちに修道会が何を重んじているか語り、志願するよう呼びかけたという。そして、この呼びかけに応えるように数多くの学生が現に志願した。アルベルトゥス・マグヌスもそのひとりで、パドヴァ大学の学生であったときにジョルダヌスの呼びかけを聞き、ドミニコ会へと導かれたのだとされる。

サクソニアのジョルダヌスは一二三六年、ナポリ大学も訪ねているが、そのときトマスはまだ、モンテ・カシーノにおり、ジョルダヌスの呼びかけに接することはできなかった。けれどもそれから何年かたってナポリ大学の学生となったトマスの傍らには、ナポリ出身の修道士でサン・ジュリアーノのヨハネスと呼ばれる神父がいた。トッコのギレルムスの伝える

ところによると神父は、

〔トマスに〕もっともすぐれた資質が具わっていることに気づき、ドミニコ会に入るよう導いた。そうすることで〔ロッカ・セッカを訪れた隠遁修道士の口を介して〕神が予告なされたことがそのとおり、現実となるように〔願いながら〕<sup>23</sup>。

おそらく神父は、民衆のなかに入ってイエス・キリストの福音を实践し、説教をする、そしてこの使命をよりよく果たすことができるように学問をつづけるという創建時から保たれてきた会のあり方を、ジョルダヌスにかわるように語りかけてトマスのこころを動かしたのであろう。モンテ・カシーノにおいてすでに芽生えていた観想への希求、それをかなえる場のあることを説いたといってもよからうか。トマスのドミニコ会入りについては他にも勧めるひとがいたかもしれない。この神父が、しかし、おおきな役割を演じたことはまちがいないようである。

なお、三十年にちかい歳月が過ぎ去った一二七二年、トマスはこのヨハネス神父と再会する。すこし前にも述べたように、二度目のパリ大学神学部教授職を辞した後、トマスがナポリにドミニコ会の神学校を設立したおりのことである。自身をドミニコ会へと導いてくれた神父、いまは年老いた神父との感動的な再会であったにちがいない。

ただし、ドミニコ会への志願を決断したおりにどのような心境であったか、それに触れたトマス自身の言葉は伝えられていない。けれども、稲垣が紹介しているように、『神学大全』には、つぎのような一節があり、トマスが、〈説教者修道会〉ドミニコ会をさまざまなあり方の修道会のなかでとくに意義のあるもの、他に優るものとみていたことがうかがわれる。『神学大全』Ⅱ-2、第一八八問題、〈修道会の多様性について〉の第六項、〈観想生活に従事する修道会は活動生活の諸活動に従事する修道会に優るか〉の一節であり、そこでトマスは以下のように述べている。

さまざまな修道会を比較し、優劣を論じるとすれば、それはまず、それぞれの修道会が目的とするところにしたがってなされるべきであろう。すなわち、ある修道会の目的が他に比べてより大きな善、もしくはより多くの善に秩序づけられているなら、その修道会は他に優るといってよい。しかし、目的とするところが同じであるなら、優劣は修道会でされる種々の実践がどれほどよく目的に適合しているか、それによって判断されるのが適当であろう。

それゆえ、二つの修道会がともに神について、また、世界について観想すること、それを目的とする場合——それはきわめて崇高な目的だが——、ただひたすら観想する修道

<sup>23</sup> Walz (1951), P. 26.

会より、観想の満ちあふれを何らかの仕方でも世にひろめようとする修道会が優れているといっただけでよい。ちょうど「照らすことが光るだけよりも優れているように」<sup>24</sup>。つまり、ドミニコ会がそうであるように、観想のみちあふれを、説教することをとおして民衆に語り伝えようとする修道会には他に優るものといえる、そうトマスは述べているのである。

もっとも、ドミニコ会のようなあり方の修道会が、他のいかなる修道会にくらべても優るとトマスが主張しているのだとすれば、首を傾げたくなくなるようなわけではないわけではない。たとえば、死をも覚悟しなければならぬような異教の地で布教することを目的とし、かつ実践する修道会にも優るといえるだろうか。死ぬことも覚悟せざるをえない布教は、神へのこれ以上はない愛がなければなしえないことであり、それを超えるような大きな善に秩序づけられる目的があるとは思えないから。観想のみちあふれを民衆に教え、伝えようとする修道会には、人里離れた山中に引きこもり、ただ観想するだけのものより優っているというのは、そのとおりであるとしても。

いずれにせよ、しかし、『神学大全』は、ドミニコ会に志願したおりにから二十年ほどもの時をへて書き始められた著書である。若きトマスが、ドミニコ会をここにあるようにみていたかどうか、それはわからない。

#### 四 トマスの監禁、そして解放

トマスのドミニコ会入りは、しかし、すんなりと実現したわけではない。家族がトマスを祝福して送り出すどころか、そのままに立ちはだかったからである。

トマスの時代、貴族や騎士など、身分の高い人びとにとって息子が托鉢修道士になることは家門の名誉と誇りにかけて、とても許せないこと、もつてのほかのことであった。ひとの喜捨にたよって、あるいは施しを乞うて生きていくことになるからである。サン・ジュリアーノのヨハネス神父はこのことに気づいていて、一方でトマスにドミニコ会への入会を志願するよう勧めながら、同時に、家族がそれを阻止すべく強引な手段にうったえることもないではないと懸念して慎重に振る舞うよう忠告したという。しかし、神父の懸念は現実のものとなった。一二四四年五月、トマスは家族によって力づくでロッカ・セッカに連れもどされ、翌年の夏に解放されるまでの一年あまりの間、山城の一室に監禁されたのである。トッコのギレルムスがトマスに寄せて綴った評伝と列聖調査の場における証言、およびそれらについてのヴァルツ、稲垣の説明にしたがってなぞってみると、この、監禁から解放までのことの成り行きは、おうよそ、以下のものであったらしい<sup>25</sup>。なお、トッコのギレルムスはサン・ジ

<sup>24</sup> トマス・アクィナス『神学大全』第24冊、160~161頁。

<sup>25</sup> トマスの監禁から解放にいたるまでのいきさつにかかわるものも含めて、トッコのギレルムスが列聖調査の場で行なった数々の証言は、Foster (1959), pp. 99~103に紹介されている。また、ヴァルツ、稲

ユリアーノのヨハネス神父とも言葉を交わす機会があったという。とすれば、トマスの監禁から解放にいたる出来事についてのギレルムスの証言は、神父から聞かされたものであったかもしれない。

さて、トマスがナポリにおいてドミニコ会に入ったようだという知らせが、あるいは入ろうとしているようだという知らせがロッカ・セッカに届いたとき、母テオドラは急ぎ、その地に赴いた。けれどもトマスはいく人かの修道士にとともにナポリを去り、ローマに向かっていた。懸念される家族の妨害からトマスを引き離すために、また、ひたむきに学問をつけようとしているトマスによりよい場をあたえるために、ナポリを去ったという。すぐ上で述べたように、一二四四年五月のこととされる。

ローマに着いた一行はそこに留まることなく、さらに、ボローニアに向かって出発した。ボローニアで五月二二日から開かれることになっていた総会に出席すべくローマを発ったドミニコ会総長ウィルデスハウゼンのヨハネス——テウトニクスのヨハネスとも——にとまわられたのだという。

このことを知ったテオドラは、同じ頃、フリードリッヒ二世の下でトスカーナにおいて軍務についていた兄レジナルドにトマスを追い、連れて帰るよう命じた。父ランドルフォは、すでに他界していたとされる。

レジナルドにとって、徒歩で移動するのがつねである修道士達を追いかけることはたやすいことで、ローマとフィレンツェのなかほど、アクアペンデントと呼ばれるところで追いついた。レジナルドは、まず、母の言葉を伝えたがトマスは聞き入れない。修道服を脱がせようとしたがトマスはそれにも応じず、むしろ、はげしくあらがったという。やむなくレジナルドは力づくでトマスを捕らえ、一旦は、一族の居城のひとつがあったモンテ・サン・ジョヴァンニに向かい、次いで、ロッカ・セッカに連れもどした。

モンテ・サン・ジョヴァンニにいる間は、ただし、トマスへの監視はそれほどきびしくはなく、サン・ジュリアーノのヨハネス神父は度々、訪れてドミニコ会に入るという決意をゆるがせることのないよう、語りかけることができたという。また、母テオドラはかならずしもドミニコ会入りを思いとどまらせようとしたわけではなく、トマスの気持ちをたしかめ、場合によっては励まそうとしたのだともいわれる。トマスをみごもっていたおりに訪ねてきた隠遁修道士から告げられたとされる言葉を思い出してみれば、そのとおりであったとしても不思議ではない。

しかし、兄レジナルドの思惑と扱いは違っていた。うむをいわせずトマスをロッカ・セッカの一室に閉じ込め、ドミニコ会入りを断念するようせまる。そして、トマスを意にしたが

---

垣によることの次第の説明は、それぞれ、Walz (1951), PP. 36~37, 稲垣 (1992), 44~46頁に記されている。

わせるのが簡単ではないことを知った後は、ひとをもてあそぶような手だてにうったえて断念せざるをえないように仕向けることもあったとされる。とても魅力的な女性を送り込んで娼婦のようにすり寄せ、トマスを罪に誘うこともあったとされるのである。

トマスは身の内にたかぶりをおぼえた。けれども、暖炉から取り出した燃えさかる薪を振りかざして女性を室から追い出し、ついで、その薪を扉にあてがって十字を焼きつけた。そして床にわが身を投げ出して祈ったという。

こうして始まったトマスの監禁は一年あまりつづいた後、一二四五年の夏、ようやく解かれ、トマスは城の外にでることができた。ただし、トッコのギレルムスの手になる評伝にしたがっていえば、トマスは解放されたのではなく、脱出したのだという。それも、閉じ込められていた室の窓からつり下げられて脱出したのだという。チェスタトンも、おそらく、この評伝によりながら、トマスがたいそう愛していた女きょうだい達が力を合わせて「大きな籠をゆわえつけたロープを〔トマスの閉じ込められていた〕塔のてっぺんにとりつけ」、それを使って脱出させたようだとして述べている<sup>26</sup>。物語としてはなかなか面白い。偉丈夫であったトマスを入れるのだからずい分、大きな籠でなければならなかったであろうし、そこに入ったトマスをつりおろすという力仕事をやってのけたのが女性達であったというわけだから。

けれども、そのギレルムスも列聖調査の場では、この、いささかドラマチックな脱出劇には触れず、単に、親兄弟はトマスをドミニコ会に返したとだけ証言している。かれらもトマスの決意はとても堅く、このまま監禁しつづけても翻意させることはできそうにないと悟ったと述べているのである。おそらく、そのとおりであったのであろう。また、教皇と皇帝の抗争の様子にもさまざま変化があり、一族はフリードリッヒII世から袂を分かって、教皇に近づいた。その教皇、インノケンティウスIV世がドミニコ会の懇願を容れて解放を求めたことも、親兄弟にトマスの監禁を解かせるよう働いたのかもしれない。

いずれにせよ、一二四五年の夏、監禁は解かれた。トマスは、ナポリのドミニコ会修道院にもどることもできたであろうが、ヴァルツ、稲垣がそろって述べているように、ドミニコ会は、同会に入って托鉢修道士になる道を選んだ「かくも高貴な生まれの男子」をその一族の領地の近くにとどめておくのは賢明ではないと判断し、また、よりよい大学で学問をつづけさせるため、ただちに北へと出発させたとされる<sup>27</sup>。以前にも述べたように、ドミニコ会にあっては、福音を実践し、それを民衆に伝えようとする修道士には、キリスト教の教理について、また、ひとと世界について、深い理解をもっていることがもとめられた。つまり、トマスのように若く、すぐれた資質をもっている修道士によりよい環境の下で学ぶ機会をあた

<sup>26</sup> チェスタトン (1976), 239頁。〔〕内、筆者。

<sup>27</sup> Walz (1951), P. 40, 稲垣 (1992), 47頁。



えることは、修道会創立当初から堅持されてきた方針に沿うことであった。

なお、トマスが解放されてから間もなく、兄レジナルドは皇帝フリードリッヒ二世によって処刑されてしまう。皇帝の暗殺を謀ったからだとされること、そして、それを知ったトマスが「正義のひとかけらもない」とつぶやき、嘆いたとされることは先にも触れたとおりである。

## 五 アルベルトゥス・マグヌスと〈だまり牛〉

一二四八年の夏から四年あまりの間、トマスはドミニコ会がケルンに創設した大学にあって、神学と哲学を学んだ。ダンテが「私にとり兄であり師であった」とトマスに語らせたひと、アルベルトゥス・マグヌスの下で<sup>28</sup>。ただし、ロッカ・セッカでの監禁を解かれた一二四五年夏からそれまでの三年の間、トマスがどこで何をしていたか、それを伝える証言はとぼしく、たしかなことはわからない。なるほどトッコのギレルムスはトマスに寄せた評伝のなかで、

ドミニコ会総長ヨハネス・テウトニクス修道士は〔ローマにおいて〕修道士トマスをキリストにおける至愛なる息子として迎え入れ、かれをともなつてパリに至り、ついでケルンに向かった。トマスは、〔同じ修道会に属する〕神学教授アルベルトゥス修道士の手で〔その地に〕創設された大学にあって目覚ましく成長した。アルベルトゥスはすべての学において並ぶ者のない存在だとみなされていた

と記している<sup>29</sup>。けれども、ギレルムスのこの記述を、トマスは一旦、パリに立ち寄ったがそこには滞在せず、ただちにケルンに向かったと解することには無理がある。

まず、ケルンには大学 (*studium generale*) とよぶにふさわしい学校は一二四五年にはまだ、創設されてはいなかった。ここで *studium generale* とは、ドミニコ会がパリ、オックスフォード、そして後にはナポリ等に立ち上げ、高度な水準で神学と哲学が講じられた学校をいう。以下では大学、もしくは神学校と表記する。

また、当時、アルベルトゥス・マグヌスは神学部の教授としてパリ大学におり、このひとの下で学ぼうとしていたのであれば、ケルンに行こうとしたはずはない。さらに、一二四八年までの三年の間、トマスがどのような形であれ、パリ大学に籍を置いていなかったとすれば、後にトマスがこの大学で教授の資格を得ようとした際、要件のひとつであった在籍年数に著しい不足があったはずで、なぜそれが問題にならなかったのか、説明がつかない。

こうしてみると、トマスはパリ到着後、すぐにケルンに向かったのではなく、ほぼ三年の間、

<sup>28</sup> 『神曲』天国篇、第十歌、平川訳、481頁。

<sup>29</sup> Walz (1951), P. 43. なお、ギレルムスのこの記述は稲垣 (1992), 50頁にも紹介されており、上記は、稲垣の文章も参照しながら、ヴァルツによる引用から筆者が訳出したものである。〔〕内、筆者。

パリ大学で学んでいたとみてよいと思われる。すくなくとも、そうみることに不都合はない。

このように一二四五年夏から三年の間、パリ大学に学んでいたとすれば、トマスには新たな知の世界が開けていたにちがいない。稲垣によれば、トマスが起居していたとみられるサン・ジャック修道院では、ドミニコ会の修道士として最初に神学部教授となったクレモナのローランの後継者サン・シェルのフーゴの指導の下に、「正確な聖書本文の復元、用語索引の作製、日常語への聖書翻訳の作業」等、聖書についての研究が活発につづけられていた<sup>30</sup>。神学部には、また、二人のドミニコ会修道士が教授として神学を講じていた。エタンプのギレルムス、そしてすこし後にも触れるように〈万学博士〉とたたえられたアルベルトゥス・マグヌスである。二人の講義には他の神学部教授のねたみを買うほどに大勢の学生が集まっていたという。人文学部では、さらに、何度も出された禁令にもかかわらず、アリストテレスの学知が紹介され、さかんに議論されていた。こうした活動や議論にトマスは接することができ、講義を聴くこともできたはずである。

ナポリにあってドミニコ会の福音運動とアリストテレスの哲学に出会ったトマスは、パリ大学においてより高度な水準でつづけられていた聖書研究とアリストテレス研究のまっただなかに身をおくことになったのである。二十歳の青年は、眼の前に、やがてそのかなたに自らの神学・哲学の体系を構築することになる広々とした知的地平が開けていることに気づいたにちがいない。

さて、アルベルトゥス・マグヌスは一二〇〇年頃、現在のドイツ南西部シュヴァーベン地方に生まれた。やがてイタリアに渡り、パドヴァ大学で学んだが、そのおり、サクソニアのヨルダヌスの呼びかけに応じてドミニコ会修道士となったことは先に紹介したとおりである。以後、フライブルグ、ストラズブールなどいくつかの大学をへて、一二四四年、ドミニコ会によってパリ大学に派遣され、神学部教授となった。さらに、一二四八年、ケルンに大学を立ち上げるよう要請され、トマスをともなってその地に移った。以後、生涯をケルンで過ごし、自ら創設した大学をよりよいものにするため、献身した。他界したのは一二八〇年、したがって、二十歳以上も若い愛弟子トマスの訃報を自分の耳で聞かねばならなかった。

アルベルトゥスはすぐれた神学者であり、『イザヤ書』、『エレミア書』、『詩篇』など聖書の多くの章句について講じ、註解を著した。同時に、アリストテレスのほとんどすべての著作にも註解を施し、キリスト教の学僧達にこの偉大な異教徒の学知に向き合う機会を開いた哲学者でもあった。アルベルトゥスはさらに、自然の事物にも旺盛で、博物学的ともいえそうな関心を持っていて、『気象学』や『鉱物論』、また、『植物論』や『動物論』などを著し、新たな知的領域を拓くことに寄与したとされる。すべての学に通暁した〈万学博士〉(Doctor

<sup>30</sup> 稲垣 (1992), 51~52頁。

*universalis*)》と、また、マグヌス、つまり大とたたえられる学僧であった。ケルンにあってトマスは、そのようなアルベルトゥス・マグヌスの下で学んだのである。生まれ育ったナポリ近郊と異なり、寒々として陰鬱な日々のすくなくない土地においてはであるが、トマスの精神が暗く、沈んでいたはずはない。おさない頃と同様に口数のすくない青年であったとしても。

事実、学業は捗り、他の学生をはるかに超える段階にまで達していたようで、そのことを物語る出来事が二つ、伝えられている<sup>31</sup>。

ひとつは、アルベルトゥス・マグヌスの担当していたある講義のなかであったとされる出来事である。その講義に出席していた学生のひとりが、だまりこくっているトマスをみて、それは講義についていけないせいではないかと感じ、親切心から個人教授をしてやろうと申し出た。チェスタトンの言を借りていえば、トマスは図体の大きな、しかし、出来の悪いヤツとして「嘲笑の対象であったばかりか、同情の対象にもなり始め〔てい〕た」のかもしれない<sup>32</sup>。とにかく、トマスは申し出を感謝して受け入れ、個人教授が始まったが、難解な講義だったので、その学生はすぐに説明に窮してしまった。するとトマスが自分はこう理解しているのだがとボソボソ話し始めた。トマスの説明があまりに明解で、そのうえ、アルベルトゥスが講じなかったことにまでおよんでいることに学生は驚き、逆にトマスに個人教授をしてほしいと頼んだ。トマスは、このことは誰にも言わないと約束させたうえで、頼みを引き受けた。その善良な学生は、しかし、トマスの明解な説明をひとりじめするのはよくないと考え、学生の指導全般を担当している教授に話した。やがてアルベルトゥス・マグヌスはその教授からことの次第を聞き、トマスが並々なぬ資質の持ち主であることを知ったという。

もうひとつは以下のような出来事である。ケルン大学には欧州のさまざまな都市からやってきた学生達が集まっていたが、滅多に口を開くことのないトマスを揶揄するようにかねらは、ナポリからやってきた〈だまり牛 (*bos mutus*)〉と呼んでいた<sup>33</sup>。ある日、アルベルトゥス・マグヌスが講義のなかで難解な問について論じていたときトマスは気づいた点をメモ書きしていたが、その紙片をうっかり、置き忘れてしまった。それを拾った学生が師にみせたところ、アルベルトゥスは、そこに記されていることがきわめて透徹したものであることにたいそう驚き、トマスに翌日の討論において次のような役割を果たすよう命じた。教授の述べるところに、それもとても難解な言明に的確に反駁しうる命題を提示するという役割である。トマ

<sup>31</sup> これらは、トッコのギレルムスやカロのペトルスといった同時代人がトマスに寄せた評伝のなかで伝えている出来事であるが、以下は、それらについてのヴァルツと稲垣の説明によっている。Walz (1951), pp. 51~52, 稲垣 (1992), 53~55頁。チェスタトン (1976), 235~238頁も参照した。

<sup>32</sup> チェスタトン (1976), 235頁。[] 内、筆者。

<sup>33</sup> 〈だまり牛〉はチェスタトン (1976), 235頁において用いられている表現である。稲垣は〈唾の牛〉と記している。稲垣 (1992), 52~55頁。

スはこの容易ではない役割を見事に果たした。するとアルベルトゥス・マグヌスはまるで預言者であるかのように、「諸君はこの人をだまり牛と呼んでいるが、いいかね、[いずれ]このだまり牛が大声で鳴いて、その声で世界をいっぱいにする時が来るだろう」と叫んだという<sup>34</sup>。

やがてアルベルトゥス・マグヌスは、ドミニコ会総長ヨハネス・テウトニクスからパリ大学神学部の教授候補を、つまり、いずれは教授となるにふさわしい学識を具えるであろうとみこまれる修道士を推薦するよう求められたとき、真っ先にトマスの名を挙げている。これからのトマスに大きな期待を抱いていたからにちがいない。こうしてトマスはケルンを離れ、パリに向かうことになった。一二五二年秋のこととされる。

ケルンにいる間に、ただし、トマスは、師アルベルトゥス・マグヌスとの間に何がしかのへだたりが生じていることに気づいていたのかもしれない。

ロッカ・セッカでの監禁から解放された後、おそらく、パリ大学にいたとみられる年月も合わせれば、七年の間、トマスはアルベルトゥス・マグヌスに師事し、兄事した。そして、その指導にしたがってドミニコ会が修道士達にもとめるところに、つまり福音をよりよく人びとに伝えるための学問にいそしんだ。また、アリストテレスの学知をひとと世界についての学のなかに、あるいは哲学のなかにつつみこみ、溶けこませるという営みにも手を携えて踏み込んだ。これらのことにまちがいはない。けれども、稲垣のみるところ、ふたりの間には見過ごしにはできない相違がある。すなわち、なによりもまず、「自らの哲学的立場を確立」し、それと緊張感をもってつき合わせることなしに、さまざまな哲学者の説くところを神学のなかに持ち込むきらいがアルベルトゥスには散見されるのに対して、トマスにはそのような傾向は見当たらない。トマスにおいては、さまざまな哲学者達の所説は、みずからの学の根幹をなす構想の下で冷徹に咀嚼され、そこで濾過されたものだけが取り込まれた。それはトマスが、「存在や認識の根本問題についてみずからの理解を一貫した仕方ですべてに努め、そこでかちとられた哲学的洞察にもとづいて」、さらにいえば、かちとられた哲学的洞察のみにもとづいて「独自の神学的総合」を構築しようとしたからであろうという<sup>35</sup>。

稲垣のこの指摘が的を射たものであるとすれば、ふたりの間には大きなへだたりが生じていたというべきであろう。トマスの寡黙さの根底には、こうしたへだたりに気づき、しかし、師の説くところに軽々しく異を唱えることを控えようとする気づきがあったのかもしれない。もちろん、その生涯をとおして、アルベルトゥス・マグヌスを敬愛するトマスの気持ちにいささかもかわるところはなかったにせよ。

<sup>34</sup> チェスタトン (1933, 1976), 237頁。[] 内、筆者。

<sup>35</sup> 稲垣稲垣 (1992), 55~57頁。ヴァルツもまた、二人の間には小さいとはいえないへだたりが生じていたようだと言っている。Walz (1951), pp. 52~53.

## 六 教授候補トマス

トマスの教授候補 (*baccalaureus*) としての任用をめぐるには、しかし、若干の齟齬があった。アルベルトゥス・マグヌスに推薦を依頼し、トマスがもっとも適任であるという返答に接していたドミニコ会総長ヨハネス・テウトニクスであるが、この人事を進めるにあたっていく分、躊躇するところがあったとされるのである。教授候補となる者は一定の年齢に達していなければならないという規定がパリ大学にはあったが、トマスはその年齢に達していなかったこと、それが、躊躇した理由のひとつである<sup>36</sup>。また、ヨハネス・テウトニクスは二度にわたってトマスをともなって旅したことがあり、その人となりをよく知っていたとみられるが、それでもなお、教授候補としてトマスを受け入れることが最善だと判断することに多少の不安を感じていたともいわれる。二度の旅というのは、ナポリからローマをへてボローニア向かったものの、その途中、家族の手でトマスが連れ去られてしまった旅、そして監禁から解放されたトマスをともなってパリまで同道した旅である。

その一方で、しかし、パリ大学神学部には教授ポストの配分をめぐる根深い対立があり、手をこまねいていれば、横やりがはいるおそれもあった。

こうした事情のあることを察知したアルベルトゥス・マグヌスは、総長ヨハネス・テウトニクスに働きかけるようサン・シェルのフーゴに要請し、それが総長に決断をうながしてようやく、トマスの任用が実現されたという。既述のとおり、一二五二年秋のこととされる。なお、サン・シェルのフーゴは先にも触れたように、かつてパリ大学の神学部教授をつとめ、サン・ジャック修道院において行なわれていた聖書研究も主導していたドミニコ会修士であるが、教授職を退いた後、枢機卿に任じられ、おりから、教皇特使としてドイツに赴いていたという。

さて、パリ大学においては、教授候補として受け入れられた学僧は一年から数年の間、二つの講義を、すなわち、聖書と『命題論集』についての講義を担当し、また、指導を受ける教授が主宰する討論に同席して参加者から提起される異論に答えるという役割を担うよう求められた。そして、それらがしっかりと担われているとみなされたとき、教授となるために踏まれねばならない手順のひとつが踏み終えられたことになる。教授候補としての期間は、それゆえ、教授となるにふさわしいか資質があるか否か、それが判断される試用期間であったといってもよからうか。また、その判断を行なうのは通常、候補者を指導する教授であった。

トマスを指導したのは、ドミニコ会がパリ大学神学部に送り込んでいたふたりの教授のひとり、プロヴァンス出身のエリアス・ブルネである。このひとは一二四八年から神学部教授

<sup>36</sup> ヴァルツによれば、三五歳に達していなければならないとされていたという。一二五二年においてトマスは二六、もしくは二七歳でしかない。Walz, (1951), P. 59.

となっていたが、ドミニコ会において堅持されていた方針にしたがって、つまり、二、三年から数年で交替させ、多くの修道士に教授を経験させるという方針にしたがって間もなく、退任することになっていた。その後任となることがトマスに期待されており、それゆえエリアス・ブルネの指導を受けることになったのだという。こうしてトマスはエリアス・ブルネの下で、聖書と『命題論集』を講じ、また、エリアス・ブルネが主宰する討論にくわって参加者からの異論に答えるという役割を担った。一二五二年秋から一二五六年にかけてのことである。なお『命題論集』は、アウグスティヌスをはじめとする教父達がキリスト教の教えについて説いたところを、一二世紀スペインの学僧、ペトルス・ロンバルドゥスが集成し、註解した書物で、以後、神学の教科書としてひろく用いられた。また、聖書についての講義においてトマスは、『イザヤ書』と『エレミア書』を取り上げたという。

そして、これらの講義と討論におけるトマスはその〈新しさ〉によって学生達をつよくひきつけたらしい。いく人もの同時代人がトマスに寄せた評伝のなかでそのように伝えており、そのひとり、トッコのギレルムスは以下のように語っている<sup>37</sup>。

トマスはそれまで寡黙さという覆いによって包みこまれていたものを〔つまり、智慧を〕講義のなかで表に解き放ちはじめた。その智慧は神によってかれのなかに吹きこまれたものであるにちがいない。〔事実、〕かれの唇から発せられる学知は教授達も含めてすべてのひとを超え、他のだれよりも明解な講義は学生達を、知を愛することへと向かわせた。また、講義においてトマスは、新しい問を立て、新しく、かつ明晰な答を見出し、討論においては新しい課題を提示した。トマスがそうした斬新な講義を行い、新しい方法で難問を解くのを聞いたひとのなかに、神ご自身がそれまで知られていなかった光でかれを照らし出していることに疑いを差し挟もうとする者はひとりもいなかった。

#### ゲイのベルナルドゥスも

神はかれ（トマス）の教えにいと豊かに恩寵を注がれたので、学生は驚嘆し、勉学への熱意を燃やした。というのも、トマスは講義にさいして新しい主題を導入し、解決の新しい方法を見出し、解決をうらづけるための新しい論証を創出したからである。こうして、かれの講義を聞いた者のうち、だれ一人として神がトマスを新しい光で照らしだしたことを疑う者はなかった

<sup>37</sup> 引用はWalz (1951), PP. 67-68によっている。ただし、〔〕内、筆者。なお、トッコのギレルムスが直接、トマスの講義を聴くことができたのはもっと後のことであり、引用文にあるようなことをどのようにして知ったか、それは不明である。

と述べている<sup>38</sup>。

このようにその〈新しさ〉によって学生達をひきつけ、学問へと鼓舞した講義と討論をつづけるためにトマスが積み重ねたにちがいない思索は、また、いくつもの論考という実も結んだ。『イザヤ書註解』、『命題論集註解』という神学上の論考、そして、『自然の諸原理について』および『有と本質について』と題する哲学上の、もしくは形而上学上の論考を教授候補であった数年の間に書き上げたのである。なかでも『有と本質について』に提示されている形而上学のもっとも基本的な概念についての理解、とくにものの存在にかかわる概念についての理解は、既存の理解の革新をうながすものであった。この論考は、それゆえ、後に二つの大著、『対異教徒大全』、『神学大全』のなかに一層、大きな実を結ばせることになる意気込みと思索の深化が若きトマスにあったことを示すものだといわれる<sup>39</sup>。

これらの論考、そして講義や討論は、したがって、トマスが教授となるに十分な資質を具えており、教授資格 (*licentiate*) が認定されるにふさわしいことを申し分なく、示しているといえよう。

そしてそのとおり、一二五六年三月、もしくはそれよりすこし前に、パリ大学総長によってトマスの教授資格が認定されたとみられる。というのも、そのことを示す書翰がパリ大学に保存されているのである。教皇アレキサンデルIV世が一二五六年三月三日付けで認めたパリ大学総長ヴェイルのアイメリク宛ての書翰がそれで、教皇はそのなかで、総長がみずから発意してトマスの教授資格を認定したことを誉めたたえている。

こうして教授たる資格を認められたトマスであるが、実際に教授として教壇に立って講義と説教を行ない、また、討論を主宰するためには、もうひとつ、踏まねばならない手順があった。プリンキピウム (*principium*)、すなわち教授就任講義を行なうことである。ものごとの始まりという意味をもつプリンキピウムが首尾よく行なわれ、学生達や他の教授達に、トマスには教授にふさわしい学識が具わっていると納得させることができはじめて教授としての種々のつとめにたずさわることができたのである。プリンキピウムないし教授就任講義は、そのように重い意味をもつものとされていた。

トマスは、それゆえ、その準備にとりかからねばならなかった。事実、パリ大学総長ヴェイルのアイメリクは、ドミニコ会総長を介して、すみやかに教授就任講義を行なうべく、準備にとりかかるようトマスに命じたとされる。しかし、パリ大学にはそれを妨害しようとする不穏な動きがあり、トマスに重くのしかかっていた。

<sup>38</sup> 稲垣 (1992), 66頁。() 内, 稲垣。

<sup>39</sup> これは、この論考の英語版の序言に寄せられた訳者アーマンド・マウラーの評である。Thomas Aquinas, *On being and essence*, Maurer, A. trans., PP. 9~10.

## 七 パリ大学における不穏な動きと教授就任講義, そして若きマギステル, トマス

教皇アレキサンデルIV世は、先ほど紹介した書翰、つまり、トマスの教授資格が認められたことを祝福する書翰を書き送ってから間もない一二五六年六月一七日、もうひとつの書翰を認め、やはり、パリ大学総長に送っている。そしてそのなかで教皇は、

学生達や教授達〔のある者〕は、托鉢修道士達による講義や討論にくなり、また、説教を聴きたいと望んでいる人びともっとも忌むべき仕方であつた。とりわけ、わたし達の愛してやまない息子、アクィノのトマス修道士の教授就任講義に出席したいと願っている人びとを妨害しようとした

と述べ、パリ大学における不穏な動きを憂慮している<sup>40</sup>。

パリ大学の状況は、まさしく、教皇の憂慮するとおりであつた。一二五六年の四月、あるいは五月に行なわれたとされるトマスの教授就任講義に出席しようとした人びとは、それをよしとしない学生や教授達、また、かれらにそそのかされた群衆によって路上で吊り上げられ、暴行されることも覚悟しなければならぬほどであつたという。かれらをそうした行動に駆り立てたのは、直接にはパリ大学神学部における教授ポスト配分のあり方に対する不満であつたが、さらにその根底には托鉢修道会への不信の念があつたとみられる。

もともとパリ大学神学部における教授ポストは、教区聖職者、つまり、どの修道会にも属さない聖職者によって占められていた。けれども、一二三〇年代に入ると修道会、とくに托鉢修道会の修道士が教授となる例が現れはじめ、その数は次第に増えていった。また、民衆のなかに入って福音を実践し、教え説くという使命感に燃えるかれらに学生達は引き寄せられ、教区聖職者出身の教授達の講義や討論は閑散としたなかで行なわれることがすくなくなつたという。くわえて、托鉢修道会に属する教授達には、大学の規則や慣行より修道会の方針を優先させる傾向があり、パリ大学をみずからの支配下に置こうとする教皇に忠実でもあつた。これらのことが重なって教区聖職者出身の教授達は托鉢修道会に属する教授達に不信の念と敵意を抱くようになったらしい。

やがて、サンタムールのギョームを中心とする教区聖職者出身の教授達は托鉢修道会に属する教授達にあからさまな攻撃をくわえはじめる。それぞれの修道会が修道士を送り込むことのできる教授ポストを減じて一つに制限すること、また、神学部教授団の慣行や規則に従おうとしない者は教授団から追放されると承知するよう要求するまでになつたのであ

<sup>40</sup> 上記引用はWalz (1951), P. 69によつてゐる。ただし、〔〕内、筆者。また、稲垣もこの書翰に触れている。稲垣 (1992), 78~79頁。



る。大学総長によって教授資格を認められていても教授団から排除されるとすれば、それは、同僚のひとりとして受け容れることが教授達によって拒否されているということの意味する。教授としてのつとめを果たすことにも支障が生じかねない。実際、トマスより数年前、一二五三年に教授資格が認められていたボナヴェントゥーラも、そのような扱いをうけていたという。ボナヴェントゥーラは、いうまでもなく、ドミニコ会と並ぶ托鉢修道会、フランシスコ会の修道士であった。

そのうえ、一二五四年、フランシスコ会のある司祭が書いた文章に、さらなる攻撃の口実を与える箇所があり、それが、かれら教区聖職者出身の教授達の敵意を一層、煽ったという。

こうした動きをみたドミニコ会総長フンベルトゥス・デ・ローマンズは修道士全員に宛てて書翰を送り、ドミニコ会の「全体を破滅させようとする悪魔的な陰謀が企てられて」おり、すべての修道士が一致して事に当たること、そして、熱烈な祈りをもって神の助けを請い願うよう訴えた<sup>41</sup>。総長は事態をきわめて深刻ものと受けとめていたのである。

このような不穏な事態は、しかし、一二五七年、一応の収束をみる。まず、一二五六年十月二三日、教皇アレクサンデルIV世は勅令を出し、ボナヴェントゥーラとトマスの名を挙げて、かれらを排除してはならず、教授団の一員として受け容れるよう教区聖職者出身の教授達に命じた。ついで、自身の主張を盛り込んだ『近時の危険について』というサンタムールのギョームの小論が教皇庁によって断罪された。そのためにとくに設けられた場で審議され、断罪されたのだという。アルベルトゥス・マグヌスも遠くケルンから呼び出され、ローマの南、アニャーニで開かれた審議の場にくわわたとされる。そして、ギョーム自身もフランス国王ルイIX世によってパリから追放され、その影響下で托鉢修道会を攻撃していた人びとも一二五七年、そうした行動は以後、止める旨、宣言した。

こうしてまず、ボナヴェントゥーラが教授団に受け入れられ、次いでトマスも迎え入れられた。教皇、教皇庁、さらにはフランス国王が後ろ盾となったことで、托鉢修道会に属する教授達への攻撃はなんとか押さえ込まれたのである。ただし、完全に押さえ込まれたわけではない。後に述べるように、一二六〇年代後半に再び燃え上がり、トマスの後半生に大きな影響をおよぼすことになる。

ともあれトマスは、こうした状況のなかで、教授就任講義を行わねばならなかったのである。すでに述べたように一二五六年の四月、あるいは五月のこととされる。ひろくパリ大学の教授達や学生達に、そして、力づくで妨害することも辞さない不穏な動きをつづけてきた者達にも教授たるにふさわしいひとであると納得させるような講義でなければならない。さてしかし、そのような講義をなしうるだろうか。トマスが不安にさいなまれていたとしても

<sup>41</sup> 稲垣 (1992), 59~61頁。

なんら、不可解ではない。そうしたトマスについてグイのベルナルドゥスは評伝のなかでひとつの逸話を伝えている。以下のような逸話である<sup>42</sup>。

『命題論集』について講じることなど、教授候補としてのつとめを果たしてきたトマスに神学教授となる時がやってきた。〔事実、〕パリ大学総長は説教者修道会の上長を介してトマスに神学教授に就任する準備にとりかかるよう命じたのである。トマスは、しかし、年齢と学識の不足を理由に固辞しようとした。……〔それは、しかし、聞き入れられず、〕従順の誓願を立てた者として受け容れるほかなかった。そこでトマスはいつものように〔礼拝堂に〕に退き、祈りを捧げた。……選ばねばならない教授就任講義のテーマについて聖なる導きを賜うよう、涙とともに祈りつづけたのである。祈りながら、やがてトマスは深い眠りにおち、夢をみた。そのなかでドミニコ会の僧服を身にまとった白髪の老人が現れ、「修道士トマスよ、なにゆえ、涙をながしながら祈っているのか」と問うた。「わたしは神学教授に任じられることになりましたが、わたしの学識はそれを担うに十分ではありません。教授就任講義のテーマを思い浮かべることさえできないありさまなのです」とトマスが答えると、老人は言った。「怖れることはない。教授の重責を担うことについて神は汝を助けたもうからだ。教授就任講義〔のテーマに〕については、つぎのことばを選びなさい。《主は天上の宮から山々に水を注ぎ御業の実りをもって地を満たされる》(『詩篇』104:13)」。老人は消え去り、トマスは目覚めた。そしてトマスは、かくもすみやかに助けたもうた神に感謝した。

トマスをめぐる数多くの逸話のなかでも、これは、もっともひろく語り継がれているエピソードだといってよいかもしれない。また、トマスよりすこし後の時代のカポットのペトルスというドミニコ会修道士はパリ大学で学んでいたおり、年長の修道士達からここに物語られている逸話を聞かされたこと、そして、夢のなかに現れた

ドミニコ会の僧服を身にまとった白髪の人物……とは、みなが尊敬していた〔ドミニコ会の創始者〕聖ドミニクスそのひとであったとパリ大学のドミニコ会修道士は一様に信じていた

ことを列聖調査の場において証言している<sup>43</sup>。

いずれにせよトマスは上記『詩篇』の一節をテーマとして教授就任講義を行い、以後、一二五九年六月、一旦、パリ大学を離れるまでの三年余りの間、若きマギステル (*magister*,

<sup>42</sup> 引用はFoster (1959), P. 34によっている。ただし、〔〕内、筆者。また、聖書のことばは『新共同訳』によっている。なお、トッコのギレルムスもこの逸話を伝えており、稲垣 (1992), 79~80に紹介されている。

<sup>43</sup> Foster (1959), P. 118.

教授)として講義と討論に、また説教に専念した。

まず、講義についてみると、この時代、テキストとして用いられたのは聖書であり、講義とはすなわち、聖書講義にほかならなかった。つまり、教授候補であったときから引き続いて聖書を講じたのである。ただし、聖書のどの章句が取り上げられたか、定かではない。けれども、教授候補であったときと同じく『イザヤ書』が、また、新たに『マタイによる福音書』が取り上げられたとみられるという。そして、今日に伝えられているそれらについての『註解』には、アウグスティヌスやヨハネス・クリュソストモスをはじめいく人もの教父達の説いたところが丹念に参照されており、トマスが、精魂を傾けて聖書講義に取り組んでいたことがうかがわれるという。そのせいもあってか、トマスの講義には大勢の学生が集まり、講義が行われた部屋からあふれる出るほどであったとされる。

次いで討論についてみると、この時代に行なわれた討論には二つの種類があった。定期討論と任意討論の二つである。これらのうち定期討論は年に何回か、予め、テーマを決めて行なわれた。また、教授候補時代のトマスに触れたおりに述べたように、討論の場に出された質問に答えるのは教授自身ではなく、その指導を受けている教授候補者であった。この定期討論には、それゆえ、教授候補者にたいする指導の一環という一面があったといつてよいのかもしれない。いずれにせよ、最初の教授時代に、つまり一二五九年六月までの三年あまりの間にトマスは、二九ものテーマを取り上げて定期討論を主宰したという。

これに対して任意討論には予め決められたテーマはなく、かつ、教授に批判的な人びとも含めて、だれでも参加することができたので、どのような質問が出されるか、予期することはまったくできなかつた。しかも討論を主宰した教授はその場ですべての質問に答えねばならなかつた。その意味で、任意討論には教授の学識が試される場という一面があった。事実、そのことを意図したさかしらな質問が出されることもあつたという。なお、教授として在任した三年ほどの間に神学部では都合、十二回の任意討論が開催されたが、そのどれがトマスによって主宰されたものであるか、はっきりとは分からないという。けれども、討論の次第が記録されたトマスの『任意討論集』からすると、後に、激しい論争が繰り広げられることになる問を先取りしたような討論が行なわれたこともあつたとみられるという。「世界が永遠ではないことは論証されうるか」という問はそのひとつである。

トマスはもちろん、教授として果たさねばならないもうひとつのつとめ、つまり、説教も怠らなかつた。その、トマスの説教については、つぎのような出来事があつたことが知られている。一二五九年の《しゅろの日曜日》にあたる四月六日、トマスが説教を始めようとする、托鉢修道会に攻撃的であつた学生団体のリーダーが突如、立ち上がり、サンタムールのギョームを支持する演説によって妨害しようとしたのである。教皇アレキサンデルIV世は事態を憂慮し、このリーダーやかれにつき従つた者達をきびしく罰するよう命じた書翰を、

同年六月二日、パリ司教に送っている。教皇やフランス国王が後ろ盾になることでなんとか押さえ込まれた托鉢修道会への攻撃であるが、完全には沈静化されていなかったのである。

さて、こうして教授としてのつとめを担うかたわら、トマスは著述にも励み、いくつかの論考を書き上げている。サンタムールのギョームや同調者の主張に反論しようとした『神の礼拝と修道生活を攻撃する者を駁す』はそのひとつである。また、アリストテレスの翻訳と解釈、そして三位一体論についての考察等を通して後世に大きな影響をあたえたとされる五世紀から六世紀にかけての思想家ボエティウスの著作について二つの註解を書き上げている。さらに、『神学大全』とならぶもうひとつの《<sup>スニマ</sup>大全》、『対異教徒大全』の執筆を始めたのもこの頃だとされる<sup>44</sup>。ただし、この大著が完成をみたのは、一二五九年六月、教授職を後任にゆずって一旦、パリを離れ、イタリアに帰ったあとのことである。

托鉢修道会を標的にしたさまざまの不穏な動きに翻弄されながら、しかし、教授としてなさねばならないつとめに、ひたむきに取り組んだ三年あまりの歳月であったといつてよからうか。

なお、教授職を後任にゆずったのは、以前にも触れたドミニコ会の方針、つまりできるだけ多くの修道士にこの職位を経験させるという方針にしたがってのことであった。ただし、こうして、パリを離れたトマスであるが、まっすぐにイタリアに帰ったわけではない。パリとケルンのなかほど、ヴァレンシアンヌで開催されることになっていたドミニコ会の総会に出席するよう、命じられていたからである。この総会には、また、アルベルトゥス・マグヌスやタランシアのペトルス等、トマスも含めると五人ものパリ大学神学部教授経験者が同席していた。ドミニコ会における神学、哲学の研鑽と教育のあり方について提言する委員会が総会内に設けられており、その委員に任じられていたからだという。そして、委員会の提言に沿って、神学についての研鑽を深め、教育を一層、充実させるために、修道会内で神学を講じる者を他のつとめから解放すること、講義にはすべての修道士が出席しなければならず、院長といえども例外ではないことなどが決められた。イエス・キリストの福音を民衆に説き聞かせようとするからには、修道士は生涯にわたって学びつづけねばならないという修道会創建以来の方針を、以前にも増して実効あるものにすることが目指されたといつてよいであろう。

<sup>44</sup> この《大全》は当時、スペインのバルセローナでイスラム教徒への宣教に従事していたペニャフォルトのライムドゥスの要請をうけて、執筆されたものといわれることがある。なるほど、イスラム教徒をはじめとする不信の徒の誤りを指摘し、かれらの主張に反駁することに多くの紙幅が割かれている。けれどもこの大著は、宣教に従事している修道士達が不信の徒から投げかけられる疑問に適切に答えるための手引書ではない。それゆえ、ライムドゥスに要請されて書き上げられたものかどうか、断定的にいうのは控えた方がよさそうである。なお、ペニャフォルトのライムドゥスは、宣教のためにスペインに赴く前、ドミニコ会の総長をつとめたことのあるひとであり、また、教会法にあかるく、遵守されるべき経済倫理をめぐって多くの発言のあったひとでもある。

さらに、アルベルトゥス・マグヌスの提言を容れて、哲学を世俗の学として疎んじてはならず、それを学び理解を深めることにそれまで以上に重きがおかれねばならないという指針も確認されたという。そして、この、アルベルトゥス・マグヌスの提言をだれよりも強く支持したのはトマスであったという。

## 八 イタリアでの日々

一二六〇年九月、ナポリで開かれたドミニコ会ローマ管区の会議でトマスは、プレディカトール・ゲネラリスに任じられた。説教者修道会であるドミニコ会、そのローマ管区における〈総・説教者〉<sup>ゲネラリスプレディカトール</sup>に任じられたのである。そしてそれは、すべての修道士のなかでも、その知見において卓越しており、また、ゲネラリスという言葉が意味しているように、修道会がおかれている状況全般に通じているかぎられたひとだけが任じられる職位だという。プレディカトール・ゲネラリスとなったトマスには、それゆえ、各地で開かれるローマ管区会議のすべてに出席し、もとめられれば管区内の修道会全体にかかわる諸事について助言を与え、必要なときにはすすんで意見を述べるのが期待された。稲垣の述べるように、〈修道会顧問〉に任じられたといつてよいのかもしれない<sup>45</sup>。

このように、しばらく前までパリ大学神学部教授であったトマス、そして今またプレディカトール・ゲネラリスに任じられたトマスには、教皇やドミニコ会総長から懸案事項について意見の具申をもとめる要請がつぎつぎにあった。ドミニコ会の朋輩達から、また、各地の君主や貴族達からもさまざまなことについて助言がもとめられた。まるでイタリアへの帰還を待ち受けていたかのよう。

そのようなトマスであるが、しかし、ヴァレンシアンヌで開催されたドミニコ会の総会に出席した後の所在について、はっきりと分かっていることは多くはない。たしかなのは上記ローマ管区の会議が開かれた一二六〇年九月までにはイタリアの地を踏んでいたこと、一二六一年ないし六二年から六五年まで、オルヴェイトのドミニコ会修道院にあって神学を講じたこと、ローマに神学の研鑽・教育の場を新たに設立するために一二六五年、その地に移ったこと、そして、再びパリ大学教授に就任するため、一二六八年イタリアを離れたことぐらいだという。一二六一年から六八年にかけて三人の教皇、アレクサンデル四世、ウルバーヌス四世、そしてクレメンス四世が教皇庁を次々に移動させたのにつき従ってアニューニ、オルヴィエト、ヴィテルボと居を移したともいわれる。三人の教皇につき従ったのは、トマスが、ドミニコ会ローマ管区だけでなく、教皇庁の顧問というべき役割を担っていたからだといわれることもあるが、それを裏づける史料は見当たらない。

<sup>45</sup> 稲垣 (1992), 109頁。

どこにいたにせよ、ただし、トマスが上記のように教皇やドミニコ会総長からの意見具申の要請に応じていたこと、また、君主や貴族達からの助言のもとにも応えていたことはまちがいない。事実、そのことを示すいくつもの論考や註解が、あるいは書翰がのこされている。

一二六五年、もしくは六六年に書かれたとされる『一〇八箇条についてのヨハネス・ウェルケレンシスへの応答』はそのひとつで、ドミニコ会総長ヨハネス・ウェルケレンシスからの要請に応えたものである。すなわち、当時、ドミニコ会フランス管区の長であったタランタシアのペトルスの著作、『命題論集講解』のなかの一〇八箇条の命題に異端の疑いありとする告発があり、その有無を判断するよう総長に命じられてトマスが書き上げたものである。トマスは、一〇八箇条の命題のひとつひとつをていねいに読み、いくつかにについて不適切な表現や誤りがふくまれていることを認めた上で、しかし、それらをもって異端であると主張するのは、告発者の理解の不足、あるいは作為によるものと指摘し、それゆえ、告発は根拠のあるものとはいえないことを説得的に示したとされる。なお、前節の末尾でも述べたように、タランタシアのペトルスは以前にパリ大学神学部教授であったひとであり、一二六八年、ドミニコ会の要請を受けてトマスが再び、このポストに就いた際、同様に、再度、教授となっている。後に教皇インノケンティウス五世となったひとでもある。

また、トマスが一二六一年ないし六二年から六五年まで、オルヴェイトにあって神学を講じたとみられることは、先に述べたとおりであるが、それは、ウルバーヌス四世がその地に教皇庁を置いた期間と重なる。そしてこの間のトマスの著作のひとつ、『四福音書連続註釈』はその、ウルバーヌス四世の要請に応じて書き上げられたものとされる<sup>46</sup>。稲垣の言を借りていえば、この註釈のなかでトマスは、四篇の福音書、つまり、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書に「あたかも一人の著者による一個の著作のような一貫性をもたせる」ことに成功しているが、それは、福音書に寄せて書かれたいく人もの教父達の註解をていねいに読みながら、しかし、なにより聖書のことばそのものに虚心に向き合っていたがゆえに、なしたことであろうという<sup>47</sup>。やがて、〈黄金の鎖 (Catena Aurea)〉と呼ばれるようになる福音書註釈である。

トマスはさらに、いく人か世俗の君主や貴族から寄せられた助言のもとにも応えていた。それも先に述べたとおりである。たとえば、一三世紀半ば頃のキプロス王フーゴ二世の要望に応じて、また、ブラバン公爵夫人のもとにも応じて論考や書翰をしたため、献呈しているのである。そのうえ、各地で開かれる管区会議にも出席しなければならなかった。オルヴィ

<sup>46</sup> トマスには同じ頃、ウルバーヌス四世の要請に応じて書き上げられた著作がもうひとつある。『ギリシア人の誤謬を駁す』がそれで、教皇の要請がなされた背景とトマスがどのようにそれに応えたかについて稲垣(1992)、124-127頁にはていねいな説明がある。

<sup>47</sup> 稲垣(1992)、128頁。

エトをはじめ、いくつもの修道院で神学も講じていた。一二六五年、アニャーニで開かれたドミニコ会管区会議は、また、ローマに神学の研鑽と教育のための新たな学校設立を決め、そのための諸事をトマスに委ねたこともすでに述べたとおりであるが、それに応えてトマスは、サンタ・サビーナ修道院に施設を整え、管区内の各修道院から派遣された修道士とともに神学を講じ、討論を主宰した。規模においてはおよばないとしても、アルベルトゥス・マグヌスによって立ち上げられたケルンの大学に見劣りしないような水準の研鑽と教育が行なわれるよう、つとめたという。

こうしたいくつもの要請やもとめ応えることに多くの時間を割かねばならない日々もすくなくなかったはずである。

トマスは、しかし、このイタリアで過ごした年月のあいだに大著、『対異教徒大全』を書き上げ、もうひとつの〈大全〉、『神学大全』も書きはじめたとされる。アリストテレスに向き合い、次節で取り上げる二度目のパリ大学神学部教授時代にいくつもの註解として実を結ぶ考察も同時にすすめられていたとみられる。いずれ触れるように、寝食を忘れて、あるいは、寝食を犠牲にして思索と執筆の時間をつくりだしていたにちがいない。このイタリア滞在時からトマスの世話役となった朋輩、ピペルノのレギナルドゥスに助けられながら。

なお、トマスとほぼ同時代のドミニコ会修道士にモルベカのギレルムスがいる。ギリシアにいたことのあるこのひとは、教皇庁でさまざまな職務につきながら、アリストテレスの翻訳にも労を惜しまず携わった。そのギレルムスによって提供されたすぐれたラテン語訳は、以後、アリストテレスを読み解き、咀嚼することについて大きな支えになったといわれる。トマスも恩恵にあずかったひとのひとりである。

ところで、トマスには、すこし前に触れた福音書註釈のほかに、もうひとつ、ウルバーヌス四世から要請されたことがあった。イエス・キリストの体と血をたたえる祝日、すなわち〈聖体の祝日（*Corpus Christi*）〉の聖務日課をととのえ、また、その日のための賛歌をつくるようもとめられたのである。聖体への信仰がことのほか篤く、一二四六年、はじめて教会の祝日として祝われたとされるリエージュの司教区において助祭をつとめたことのあるウルバーヌス四世は、一二六四年、すべての教会においても祝日として祝うよう命じた。そしてトマスにこのようにもとめたのだという。

トマスはそれに応えて聖務日課をととのえた。そして、〈パンジェ・リングア〉、すなわち「いざ歌えわが舌よ、光栄あるおん体を（*Pange lingua gloriosi corporis mysterium*）」と歌い出される賛歌をつくった。また、〈ラウダ・シオン〉、つまり、「シオンよ、救い主をたたえよ（*Lauda Sion Salvatorem*）」ではじまる賛歌もトマスの作だとされる。ヴァルトツが「すぐれた詩人の魂の強さと暖かさをもって信仰の真理を表現した〔トマスは〕……まさしく、聖体についての詩人であり、神学者である」と評し、稲垣も、これらが歌われるとき、わたし達が耳にする

のは「トマスその人の信仰と思索のみのりであり、かれの詩人的魂の鼓動である」と語る賛歌である<sup>48</sup>。今も歌い継がれているという。

なおこうしたトマスに対して、ウルバーヌス四世の後の教皇クレメンス四世から、ナポリの大司教に任じたいとの打診があったという。トマスは、しかし、固辞したとされる。何度も述べてきたように、教会や修道会で高位にのぼり、権勢と富を手にするを終生、おそれ、避けようとしたトマスであってみれば、なんら意外なことではない。もっとも、トッコのギレルムスの伝えるこの逸話には、真偽を定めがたいところがあるといわれる。けれども、かりに、クレメンス四世が事実、そのように打診したとすれば、そこには、皇帝派から距離を置き、教皇に近づきつつあったアクィノー族の歡心を買おうとする思惑があったのかもしれない。

ともあれ、数かぎりなく寄せられたさまざまな要請やもとめに応えつつ、しかし、思索と執筆に没頭していたトマスは、イタリアでのそのような日々がながくつづくよう、願っていたかもしれない。けれども、それは、かなえられない。ドミニコ会総長ヴェルチェリのヨハネスによって、再び、パリ大学神学部教授に任じられたトマスは、一二六八年秋、イタリアを離れた。パリ大学に生じていたいくつかの困難な事態が、イタリアにとどまることを許さなかったのである。

## 九 ふたたびパリへ

一二六八年秋、ドミニコ会がパリ大学神学部保持していた二つの教授ポストに就くよう命じられたのは、トマスと前節でも言及したタランタシアのペトルスである。二人は共に再任であり、できるだけ多くの修道士に教授職を経験させるという会の方針からすれば、これは、異例の人事であった。総長ヴェルチェリのヨハネスがこのように異例の人事に踏み切ったのは、ドミニコ会を危機に陥れかねない事態が、再び、パリ大学に生じており、それに対処するためには、敢えて、経験者を任用するほかないと受けとめていたからだとされる。以前に述べたように教皇が、また、フランス国王が後ろ盾となったことで、なんとか押さえ込まれていた托鉢修道会への攻撃が、十年ほどの時をへて再燃していたのである。

パリにもどったトマスは、まず、この攻撃の前に立ちはだからねばならなかった。ただし、トマスが直面させられたのはそれだけではない。他にも二つの論争、すなわち、ラテン・アヴェロエス派と呼ばれる人文学部教授達との、そして、アウグスティヌス派と呼ばれることもあるフランシスコ会に属する神学部教授達との論争の渦中であってかれらに論駁しなければならなかったのである。そしてトマスは、一二七二年春、後任に教授職をゆずってパリを

<sup>48</sup> Walz (1951), P. 98, 稲垣 (1992), 130頁。〔〕内、筆者。



離れるまで、それらに立ち向かいつづけた。ここで、詳細に立ち入ることはできないが、それぞれがどのような結末にいたったか、簡潔に眺めておきたい。

さて、ドミニコ会、フランシスコ会などの托鉢修道会への攻撃の中心にいたのは、かつてと同じくサンタムールのギョームであった。ギョームは、一二五七年、フランス国王ルイIX世によってパリから追放され、故郷のサンタムールにもどっていたが、一二六六年、托鉢修道会を批判する文章を教皇クレメンス四世に書き送って、攻撃を再開したという。パリにはまた、ジェラルール・ダヴェヴィユ、リジューのニコラ等の同調者がおり、かれらもギョームと呼応して任意討論や説教の場で、托鉢修道会への攻撃を始めた。それも、「托鉢」という修道会のあり方、そして修道会の行なっている種々の活動は、聖書に記された掟や教会の定めた法にもとるものであり、したがって会の存在そのものが容認されえないとする攻撃を始めたとされる。

かれらは、すなわち、托鉢修道会の修道士達がおのれの肉体の苦役によらず他からの喜捨によって生きていこうとするのは、聖書に記された「お前は顔に汗を流してパンを得る」(『創世記』3:19)という掟にもとる生き様だといわざるをえないこと、また、人びとに説教をし、罪の告解を聴くのは、教会の定めた法によってそれぞれの教区の司牧に付与された権能を侵す行為であることなどをあげて、会の存在そのものに疑義を投げかけたのだという<sup>49</sup>。

これに対してトマスは、『靈的生活の完全性について』、『人びとが修道会に入るのを妨げる者共の有害なる教説を駁す』などの論考を通してかれらの主張のひとつひとつに反論し、また、ドミニコ会の修道士達がそうであるように、清貧、貞潔、従順の誓願を立てて修道生活に入るのは、おのれのすべてを捨てて福音を實踐し、神と隣人への愛に生きようとすることであり、ならぬ、非とされる生き方ではないと承知するよう説いた。

このような反論と説諭を、ただし、サンタムールのギョームやジェラルール・ダヴェヴィユ等がトマスの望んだように受けとめたか否か、はっきりとしたことは分からない。いずれにせよ、しかし、一二七二年秋、ギョームとジェラルールが相次いで他界したことで、四半世紀近くの間、断続的につづいた托鉢修道会への攻撃もようやく杜絶えたという。

ところで、パリ大学人文学部には、スペイン・コルドヴァの生まれで、ラテン世界ではアヴェロエスという名で知られていた一二世紀のイスラム思想家イブン・ルシドを、アリストテレスのもっとも優れた註釈者であると評価し、その解釈を他にまさったしかなものとみる人びとがいた。ラテン・アヴェロエス派と呼ばれる人びとである。そして、かれらを代表する論客だったのが、若き教授ブラバンのシゲルスである。ダンテがトマスやアルベルトゥス・

<sup>49</sup> なお、第二リヨン公会議は一二七四年、すくなくとも二つの托鉢修道会、すなわちドミニコ会とフランシスコ会はこうした批判をまぬがれるという教命を採択している。Tanner (1990), pp. 326-327.

マグヌスをはじめとする一二名の賢人のひとりに数えたことで、その名がひろく世に知られるようになったともいわれる<sup>50</sup>。サンタムールのギョーム等による攻撃にくわえてトマスが立ち向かわねばならなかった二つ論争のひとつというのは、このようなシゲルスとのそれである。

シゲルスの表明した見解のなかで、トマスがけっして容認できなかったのは、アリストテレスの哲学が導く言明のなかには、キリスト教の教えと相容れないが、しかし、ひとが理性にしたがって思考するかぎり、偽であるとして斥けることのできないもののあることを認めざるをえないという見解である。そして、〈すべてのひとについて知性は単一である〉という言明はそのひとつだとされる。シゲルスも、ただし、そうした言明を信仰の教えと並び立つ真理だと主張するわけではない。けれども、ひとの理性が斥けることのできない言明であると主張するかぎり、シゲルスの見解には「相互に対立的な信仰と理性の真理を同時に承認する立場」が含意されているといわれても仕方がない<sup>51</sup>。もとより、〈二重真理説〉と形容されることのあるこのような立場をトマスが容認するはずはなく、『知性の単一性について』と題する論考を書き上げて反駁した。

その際、トマスは、シゲルスが上記のようにいう言明をただ、信仰の真理と相容れないという理由に訴えて斥けようとしたわけではない。つまり、哲学の立ち入ることのできない信仰の真理、それと対立するがゆえに偽であるとする論を立てて、いわば、超越的な論を立てて斥けようとしたわけではない。そうではなくトマスは、シゲルスのいう言明はアリストテレスの哲学から導きえないことを示そうとした。かりにシゲルスの見解は、アヴェロエスの述べるところに、あるいは、アヴェロエスによるアリストテレスの註釈に忠実であるとしても、アリストテレスの哲学それ自体の解釈としては、むしろ、誤りを含んでいることを示そうとしたのである。

シゲルスは、しかし、誤りを認めて自説を撤回することも、沈黙に追いやられることもなかった。新たな論考によってトマスに反論を試みたという。ただし、こうした論争を挑みながら、人文学部の教授達の多くは、トマスに畏敬の念を抱きつづけていたとみられる。

一二七四年三月、トマスがローマの南フォッサ・ノーヴァのシトー会修道院で息をひきとったことを伝え聞いた人文学部の教授達は、連名でドミニコ会総長に書翰を送り、遺骸をパリに移送するよう懇願した<sup>52</sup>。若き日のトマスがそこで学び、やがて講義や討論を通じて言葉に言いつくせないほどの恩恵をそこにもたらした街パリ、そして、すべての大学街のなかでもっとも高貴なパリ以上にトマスを埋葬するにふさわしい街はないとうったえ、遺骸の移送

<sup>50</sup> ダンテ『神曲』天国篇第一〇歌、平川訳、479頁。

<sup>51</sup> 稲垣 (1992)、155頁。

<sup>52</sup> この書翰の全文がFoster (1959)、PP. 153~155に収録されている。

を懇願したのである。教授達はまた同じ書翰のなかで、一二七二年六月、フィレンツェで開かれていたドミニコ会総会に対して、トマスをもう一度、パリに帰任させてほしいと要請したことも思い起こすようもとめている。人文学部の教授達の多くが深くトマスを敬愛し、畏敬の念を抱きつづけていたことを物語る書翰だといってよいであろう。なお、この書翰が書き送られたおり、人文学部の学部長をつとめていたのは、あの、ブラバンのシゲルスであった。このことからもうかがえるように、一方で論争を挑みながらも、シゲルスは、トマスをもっとも卓越した哲学者であるとたたえてやまなかったといわれる。

ところで、若き日のトマスが、ナポリ大学でアリストテレスに出会ったこと、そして以後、その学知を冷徹に咀嚼したうえで、ひとと世界についての理解のなかに、つまり哲学のなかにつつまこむという営みに携わったことはくりかえし、述べたとおりである。その接し方に大きな隔たりはあっても、いたずらにアリストテレスを遠ざけるのではなく、むしろ、肯定的に受けとめていたということについていえば、ラテン・アヴェロエス派と相通じるころがあったといってよい。つまり、誤解を招きやすいくくりを取って用いていえば、トマスにはラテン・アヴェロエス派とともにアリストテレス派とみなされてもあながち、不適切とはいえない一面があったのである。そのようなトマスは、ひとと世界についての理解のなかにキリスト教の教えと相容れない危険な思想を、異教徒アリストテレスに由来する危険な思想を持ち込もうとする者だとして批判にさらされた。アウグスティヌス派と呼ばれる人びと、とりわけ、フランシスコ会に属する教授達の批判にさらされ、かれらとの論争の渦中に置かれたのである。トマスは、かれらの眼にはアウグスティヌスにはじまる正統的なキリスト教神学の危険な革新者と映っていたといってもよい。トマスが立ち向かわねばならなかったもうひとつの論争である。

争点のひとつとなったのは〈世界の永遠性〉をめぐる問、もしくは、〈世界に時間的な始まりがあったことをひとは、論証しうるか〉という問であった。フランシスコ会に属する教授達、なかでも、ジョン・ベッカムが、そしてボナヴェントゥーラが論証可能であるとしたのに対してトマスは『世界の永遠性について——つぶやく者どもに対して』という論考をもって応じ、それは信じるべき事柄、もしくは信じるほかない事柄であって、ひとが論証しうるものではないと説いた。トマスはさらに、信じるほかない事柄を論証しようとするとき、ひとは必然ならざる論をもてあそぶことになる。そのような錯誤に陥り、不信の徒にキリスト教の信仰を嘲笑する口実をあたえるようなことがあってはならないと補いかれらを戒めた<sup>53</sup>。稲垣の述べるように、トマスには「信仰と神学を哲学の思いあがった攻撃から」守らねばなら

<sup>53</sup> トマスはこのことを『神学大全』第一部、第四六問題第二項で説いている。『神学大全 第四冊』、61~69頁。

ないという思いがあったとってよいのかもしれない<sup>54</sup>。筆者にとっては、また、トマスの大らかに感服させられる論述である。そのように感じる理由は後の章で立ち入って述べるが。

なお、この論考の副題にいう〈つぶやく者ども〉とはだれのことなのか、定かではないが、トマスの語るところを理解しようとせず、はっきりしない物言いをつづけるアウグスティヌス派の神学者、とくにジョン・ベッカムを指しているのではないかといわれる。

ところで、時期的にはトマスが、二度目のパリ大学神学部教授職を辞してイタリアに帰った後のことになるが、異端の嫌疑がラテン・アヴェロエス派に対して、そしてトマス自身に対してもかけられた。一二七二年一月一〇日、パリの司教エティエンヌ・タンピエによって異端であるとして断罪された一三箇条の命題は、すべてラテン・アヴェロエス派のものであったが、同じ司教が一二七七年三月七日に断罪した二一九個条の命題のなかにはトマスに帰せられるものがあるとされる。この断罪は、直接には、ラテン・アヴェロエス派について異端の有無をあきらかにするようもとめた教皇ヨハネスⅡⅠ世の命にに応じてなされたものであるが、その背後には保守派とされる神学者や聖職者の存在があったという。また、オックスフォード大学を管轄するカンタベリーの大司教ロバート・キルワービーも同じ頃、三〇個条の命題を異端であるとして断罪したが、そのなかにもトマスのもととされる命題が含まれている。冷徹に咀嚼したうえで、アリストテレスからも学ぶべきは学ぶという態度で臨んでいたトマスであるが、保守派とされる神学者や聖職者の眼には、偉大なる異教徒に取り込まれてしまった危険な存在と映っていたのであろう。いずれにせよ、以後の神学、哲学には正統とみなしうるか、それとも異端の告発をまぬがれえないかをめぐる確執の影が、それも、党派的な確執の影が落ちることになったようである。

さて、以上にみた攻撃や批判に立ちほだかり、論駁すること、それが再度、パリ大学に復帰させるにあたってドミニコ会総長がトマスにもとめていたことであったのはまちがいないにせよ、また、トマスがそれによく応えたのもまちがいないにせよ、神学部教授としてのトマスには、そのことにかかわりなく果たさねばならないつとめがあった。聖書を講じ、討論を主宰し、そして説教するというつとめである。トマスはそれらにもしっかりと向き合った。そのことはいくつもの討論の記録や聖書についての講解をとおしてうかがい知ることができる。なかでも『ヨハネ福音書講解』にはこの間に深められた思索が昇華されており、トマスの神学が新たな高みに達したことを示すものといってよいといわれる。

トマスはまた、著述にも休みなく打ち込んだ。まず、前節でも触れたモルベカのギレルムスの手になるすぐれたラテン語訳が多くの著作について参照できるようになり、アリストテレス註解は大いに進捗した。『形而上学』、『命題論』をはじめ、『自然学』、『ニコマコス倫理学』

<sup>54</sup> 稲垣(1992), 163頁。

など、主要な著作についての註解が次々に書き上げられたのである。これらは、人文学部の教授達からも待望されたものであったともいわれる。事実、教授達は先に紹介したドミニコ会総会宛の書翰のなかで、未完のままイタリアに持ち帰られたもののなかにその後、完成した註解があるなら、それらの写本を遺骸とともにパリに送り届けてほしいと懇願しているのである。

そして、イタリア時代に執筆が始められた『神学大全』は、この二度目のパリ大学時代に第二部まで書き上げられたとされる。第二部だけでも途方もない大著である。一二六八年秋からのわずか三年半ほどの間に数多くの論考や註解が、また、大部の著作がものされたのであり、驚くほかない。それも、いくつもの攻撃や批判に立ち向かい、講義、討論、説教というつとめも果たしながらのことなのだから。なるほど、ピペルノのレギナルドゥスにくわえて、さらに数名のドミニコ会の朋輩が口述筆記をするなどしてトマスを支えたという。としても、ひとたび僧房に入ると他のすべてをなげうって深々と思索に沈潜し、著述に打ち込んでいたにちがいない。事実、口述筆記にあたった朋輩のひとりから聞いたこととしてトッコのギレルムスが伝えるところによれば、トマスは、

長時間……、口述をつづけたことで疲労をおぼえると、しばらく、横になって休息をとることがあった。横になりながら、しかし、口述は止めなかった

という<sup>55</sup>。

トマスの思索への沈潜がいかに深いものであったかについては、次のような逸話も伝えられている。やはり、トッコのギレルムスによって伝えられている逸話である<sup>56</sup>。

ある日トマスは〔フランス国王〕ルイIX世から昼食をともにするよう、招かれた。『神学大全』を書きつぐことにかかりきりになっていたトマスは、一旦は、招きに応じられないと伝えた。けれども、……〔ドミニコ会〕修道院長に〔招きに応じるよう〕命じられて国王のもとに赴いた。〔食事がはじまってしばらくたったとき〕国王の近くに座っていたトマスは、突如、拳を振り上げて食卓を叩き、大声で叫んだ。「そうだ、これでマニ教徒〔を論破して、かれら〕の異端に結着をつけられるぞ」と。修道院長はトマスをわれに帰らせようとしてその僧服を引っ張り、「国王との食事の最中だ」とたしなめた。われに帰ったトマスは国王に頭を下げ、ころころにないという有様だったことについてゆるし

<sup>55</sup> 引用は、Walz (1951), P. 135 によっている。

<sup>56</sup> 以下の引用は、Walz (1951), PP. 128~129 によっている。ただし、〔〕内、筆者。なお、文中の「そうだ、これでマニ教徒〔を論破して、かれら〕の異端に結着をつけられるぞ」という言葉は、チェスタトン(1933, 1976)の邦訳版では「これでマニ教徒どもを片づけられるぞ」と表現されている。同書、270頁。

を乞うた。国王は、しかし、そのようなトマスに感銘を受けたようで、……トマスをとらえてはなななかつた想念が失われてしまうことのないよう、書記官に命じてそれを書き取らせた。それも、その場で。

このようなことがあったのは、一二六九年の後半から七〇年はじめにかけてのある日のことだとされる。ただしそうしたおりに、トマスが「これでマニ教徒……の異端に結着をつけられるぞ」と叫んだというのはいささかいぶかしい。というのも、マニ教徒のことをトマスが強く意識していたとすれば、それはおそらく、『対異教徒大全』を執筆していた頃のこと、つまり、イタリア時代のことだと考えられるからである。むしろ、ラテン・アヴェロエス派との、あるいはアウグスティヌス派との論争に結着をつけられるぞと叫んだのをトッコのギレルムスが誤って伝えているのかもしれない。ともあれ、トマスが、国王と同席していることさえすっかり忘れてしまうほどに深く思索に沈潜していたことを物語る逸話である。

こうして思索に沈潜し、著述に打ち込んでいたトマスであるが、一二七二年春、後継者となったロマノ・オルシニの教授就任講義を見届け、復活祭の後、パリを離れた。おりしもパリ大学では、ラテン・アヴェロエス派への異端宣告に端を発して混乱した状態がつづいていたが、トマスは、なに変わることなく討論を主宰するなど、教授としてのつとめをはたしていたという。

## 十 ナポリでの日々とトマスの死

パリを離れたトマスがまず向かったのはフィレンツェであった。一二七二年六月フィレンツェで開かれることになっていたドミニコ会総会とローマ管区会議に出席するようも定められていたからである。会議が終了するとトマスはナポリに向かい、九月半ば頃に到着、サン・ドメニコ・マッジョーレ大聖堂に隣接する修道院に旅装を解いたという。十代のトマスがそこで学び、そしてドミニコ会と出会った街ナポリに三〇年近い歳月をへて再び帰り、そしてその地に落ち着いたのである。わずか、二年足らずの間でしかなかったが。

いく人もの人びととの再会があった。なかでも、サン・ジュリアーノのヨハネス神父との再会は感慨深いものであったにちがいない。ナポリ大学の学生であった若きトマスをドミニコ会へと導いたヨハネス神父、そして、兄達の手で居城の一室に閉じ込められていたトマスをはげましつづけてくれたヨハネス神父である。そのような神父との再会は言葉に言い表せないほどのよろこびであったことであろう。

ふた親、そして兄弟の多くはすでに世を去っていたが、健在でナポリからさほど遠くないところに住んでいた一族のいく人かとも再会し、頼られると親身に世話をした。たとえば、妹アデラシアの夫で、この年の八月に他界したアクィラのロゲリウス伯爵の遺言執行に労を

厭わず手を貸した。労を厭わずといったのは、トマスが執行人に指名されており、しかも、遺言のなかに簡単には処理できない条項が含まれていたからである。正当とはいえない仕方  
で取得された財産があり、それを本来の持ち主に返してほしいという条項である。トマスは  
どのように処理するにせよ国王の許可を得なければならないと判断し、カプアにいたシャル  
ル・ダンジューに面会をもとめて同意をとりつけた。以前にも述べたようにこのころ、ナポ  
リを含むシチリア王国を統治していたのがルイⅨ世の弟シャルル・ダンジューであった。そ  
して、シャルルはこの面会のおりにトマスに好感を抱いたようで、以後、親しい友人として  
遇するようになったという。

トマスはまた、ローマの南マエンザの城主でチェッカーノ伯爵アンニバルトに嫁いでいた  
姪のフランチェスカのためにも親身に世話をした。ナポリで持病の治療をしたいと願って  
いたフランチェスカであるが、夫が国王シャルルの不興を買っていたため、入国することが  
できなかった。けれども、すでにシャルルから友人として迎え入れられていたトマスのとり  
なしによってナポリに入ることが許され、治療を受けることができるようになったのだとい  
う。

そのようなナポリの地にトマスは神学校 (*studium generale*) を設立した。すこし前に触れ  
たドミニコ会のローマ管区会議、フィレンツェで開かれた管区会議は管区内に新たに神学校  
を設立することを決め、場所の選定と招聘する教授の人選をトマスに委ねたからである。そ  
して、神学校を置く場所としてトマスが選んだのがナポリであった。

ただし、その頃すでに管区内で指折りの都市になっていたフィレンツェをはじめとする他  
の諸都市ではなく、トマスがなぜ、ナポリを選んだのか、はっきりとは分からない。かつて  
学生としてここで学び、ドミニコ会と出会った街ナポリにトマスは格別の愛着を覚えていた  
にちがいない。けれども、それだけのことでナポリを選んだとは考えにくい。むしろ、半世  
紀近くにわたって存続していたナポリ大学の伝統があり、しかも、国王シャルル・ダンジ  
ューがその一層の充実を図ろうとしていたことが、ナポリを選ばせたとみるほうが、より説  
得的であろう。事実、シャルルはこの神学校をナポリ大学と一体をなすものとみなし、支  
援を惜しまないことを約束している。シャルルはまた、紛争と混乱の絶えないパリ大学に書翰  
を送り、学問をするにふさわしい環境がよりよく保たれているナポリに移ってくるようす  
べての教授、学生に勧めている<sup>57</sup>。

いずれにせよ一二七二年九月、ナポリ大学に隣接するドミニコ会修道院内に新たな神学校  
が設立され、そこでトマスは聖書について講じはじめた。『詩篇』が、つまり、自身の教授  
就任講義でその一節をテーマとした『詩篇』が取り上げられたという。なお、ナポリ大学  
の学生も、トマスのそれも含めてこの神学校で開講された講義を聴講することができた。そ  
して、

<sup>57</sup> この、一二七二年七月三十一日づけの書翰は、『パリ大学公文書記録集』に収録されているという。

本章の冒頭でも言及したように、聴講した学生のひとりがトッコのギレルムスであった。また、シャルル・ダンジューはトマスの講義を支援するため、一二オンスの黄金を毎年、ドミニコ会に寄進する旨、申し出たという。それも、以前に触れたとおりである。

さて、パリ大学の教授時代と同様にトマスがナポリでも討論も主宰したかどうか、それは不明である。けれども、説教は行なった。しかもそれは、ナポリの民衆を深く感動させるものであったという。一二七三年二月二日から四月九日にかけて、すなわちこの年の四旬節にナポリの大聖堂サン・ドメニコ・マッジョーレで行なわれた説教がそれである。列聖調査の場でナポリの公証人ヨハネス・コッパが行なった証言によれば、ほとんどすべてといってよほど数多くの市民が連日、サン・ドメニコ・マッジョーレに足を運び、説教に耳をかたむけたという<sup>58</sup>。また、トマスに寄せた評伝のなかでトッコのギレルムスは、眼を閉じ、天を仰いで語られるトマスのひとことひとことを、

人びとは神ご自身の発せられたことばであるかのように、うやうやしく聴いていた

と伝えている<sup>59</sup>。なお、聴衆が親しみを覚え、そこから多くを感じ取ることができるよう、トマスはこの一連の説教をナポリの方言で行なったという。

著述も休みなくつづけられた。すでにパリにおいて始められていたアリストテレスに註解をほどこす作業はそのひとつで、それは、ナポリにおいても継続され、『天体論』、『生成消滅論』などへの註解として実を結んでいる。前節で触れたように、これらは、パリ大学人文学部の教授達が写本を送ってくれるよう懇願していた註解であったかもしれない。トマスはまた、キリスト教の信仰への手引書ともいべき『神学要綱』、および天使についての論考、『分離的実体について』も書きはじめた。朋輩レギナルドゥスに献呈して長年の労に報いようとした論考であるが、いずれも、未完のままになっているという。

二度目のパリ大学教授時代に第二部まで書き上げられていた『神学大全』の続編、第三部も休みなく書き継がれた。そして、おそらくは〈聖体の秘跡〉をめぐる応答(第七九問題から八三問題)を書き上げたころ、つぎのようなことがあったと伝えられている。

毎夜半、修道院内がしずまりかえる頃合いに、つまり、朝課がはじめられる刻限よりいくらか早い頃合いに、起居していた修道院内の聖ニコラウス礼拝堂にトマスがひとりで行くことに気づいた聖具係の老修道士カセルタのドミニクスは、ある夜ひそかに礼拝堂のなかの様子をうかがった。そこで老修道士がみたのは、二キュービッドほど床から浮かび上が

<sup>58</sup> この証言は、Foster (1959), P. 116に収録されている。

<sup>59</sup> 引用はWalz (1951), P. 149によっている。また、稲垣 (1992), 175~181頁には、朋輩レギナルドゥスによってつくられた説教の要約の一部が紹介されている。



ったトマスであり、また、浮かび上がったまま、十字架のイエスに祈っているトマスであった<sup>60</sup>。そして老修道士は、十字架上のイエスがことばを発し、それにトマスが答えるのを聞いたという<sup>61</sup>。

トマスよ、汝はわたしについてよくぞ書いた。汝の労苦の報いとして何をのぞむか。

主よ、御身のほか、いかなる報いも望みません。

〈聖体の秘跡〉について書き終えたトマスは、さらに第八四問題以降の執筆に取りかかった。〈悔悛の秘跡〉について書きはじめたのである。しかし、第九〇問題第三項を書き終えたところでなぜか筆を措いた。もしくは、口述を止めた。いつも身近にいた朋輩ピペルノのレギナルドゥスはこのときのトマスの様子も目の当たりにしていたとみられるが、なにも書きのこしてはいない。けれども、トマスのもらしたとされる言葉が、後にレギナルドゥスに接する機会があったいく人かの同時代人を介して、伝えられている。

列聖調査の場におけるカプアのバルトロメウスの証言はそのひとつで、それによれば、一二七三年の聖ニコラウスの祝日にあたる一二月六日、十字架上のイエスとことばを交わすことがあったとされる礼拝堂、つまり、聖ニコラウス礼拝堂でミサを捧げていたトマスになにかしら不思議なことが起こり、以後、一切、筆を執ろうとしなくなったのだという。

いぶかしく思ったレギナルドゥスが執筆をつづけるようながすと、トマスはできないとこたえるばかりであった。レギナルドゥスがさらに、なぜかと問いつめたところ、

レギナルドゥス、わたしにはできない。なぜなら、これまでわたしの書いてきたものはすべて、藁のようにみえるからだ

とつぶやいたという<sup>62</sup>。そして以前にも増して放心していることが多くなった。それも、フランス国王ルイⅨ世に招かれた昼食の席でそうであったように、思索に沈潜するあまりわれを忘れ、放心してしまうのではない。ただただ、魂が消え失せてしまったようになるのだという。

こうしたことがあってからしばらくして、トマスはロゲリウス伯爵に嫁いでいた妹のテオドラをナポリの南、サン・セヴェリーノ城に訪ねているが、幼いころから格別に可愛がってくれた兄の様子がすっかり変わっていることにテオドラはうろたえ、レギナルドゥスに一体、何があったのかと問うたという。レギナルドゥスは、聖ニコラウスの祝日の日にミサを捧げ

<sup>60</sup> ニキュービッドほどということ、八〇cmから一mくらいということになる。

<sup>61</sup> 引用は稲垣（1992）、189頁によっている。

<sup>62</sup> Foster（1959）、P. 109.

てからずっとこのようなありさまなのだと言え、次いでトマスに、放心するばかりで、執筆をしないのはなぜかとくりかえし問いつめた。それも、つつしみを忘れたような言葉で問いつめた。するとトマスは、だれにも口外しないと約束させたうえで以下のようにもらしたという<sup>63</sup>。

〔わたしがみたもの、〕わたしに啓示されたものにくらべれば、これまでわたしが書いてきたものはすべて、藁のようにみえるからだ。

トマスがみたのはなにか、トマスに啓示されたのはなにか、それはもとよりわからない。なんであれそれは、これまでひたむきに文字に刻んできた観想と思索の結晶を藁のよう思わせてしまうなにかである。ヴァルツと稲垣が示唆しているように、『コリントの信徒への手紙』においてパウロが語っている「そのとき」が、すなわち、

わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせ  
て見ることになる

という「そのとき」が、聖ニコラウスの日にミサを捧げていたトマスにやってきて、「顔と顔を合わせ」るようにくっきりと姿を現したなにかなのかもしれない<sup>64</sup>。そして、くっきりと姿を現したのは、そのほかの「いかなる報いも望みません」とトマスが答えた「御身」であったのかもしれない。

さて、とにかくふつりと筆を措き、しばしば魂が消え失せてしまったようになることのあるトマスであるが、翌一七四四年の一月末、あるいは二月はじめにナポリを発ち、リヨンに向かった。その年の五月にリヨンで開かれることになっていた公会議に出席するよう教皇グレゴリウスX世に命じられていたからである。この公会議では多年、袂を分かっていた東西二つの教会、つまりギリシア正教会とカトリック教会の合同を図るべく協議が行なわれることになっていたが、そこにトマスは自身の論考『ギリシア人の誤謬を駁す』を携行のうえ、同席するようもとめられていたのだという。なお先に第八節で註記したようにこの論考は、最初のパリ大学神学部教授職を後任にゆずってイタリアに帰還していたおり、ウルバーヌスIV世に請われて書き上げられたものである。

ナポリを発ったトマスは、一族の居城ロッカ・セッカの近くを通るラテン街道を北にすす

<sup>63</sup> Foster (1959), P. 110. □内、筆者。

<sup>64</sup> 『コリントの信徒への手紙 一』13:12. Walz (1951), P. 157, 稲垣 (1992), 190~192頁。なお稲垣は、『神学大全 第四五冊』(創文社, 2007)に付された訳者解説、とくに223~226頁でも同様に述べている。

んだという。そこで生まれ、育ち、いつきは監禁されていたロッカ・セッカである。しばし立ち寄ったかもしれない。そして途中、つぎのようなできごともあったと伝えられている。やはり、カプアのバルトロメウスが列聖調査の場でそのように証言しているのである。

体調がはかばかしくないので馬に乗って旅をつづけていたトマスは道に張り出していた木の枝にぶつかり、落馬してしまった。そのことでトマスの気持ちがさらにふさがってしまうかもしれないと案じたレギナルドゥスは、公会議では、すべての教会とドミニコ会のために、また、シチリア王国のためにあなたは大いに貢献なさるだろうと声をかけ、また、あなたはポナヴェントゥーラとともに枢機卿に任じられるでしょうと語りかけて元気づけようとした。それに対してトマスは、

自分は、今のままにいて修道会にもっともよく、つかえることができる。……〔だから、〕今のままの自分であるつもりだ

と答えたという<sup>65</sup>。

日を追って、しかし、トマスの疲労と体の衰えはひどくなり、そのまま旅をつづけるのはむずかしくなった。それゆえトマスは、同行していたレギナルドゥスとともに、街道をすこし離れたところにあるマエンザ城に姪のフランチェスカを訪ね、そこで体調の回復をまつことにしたという。けれども体の衰えは深刻になるばかりであった。グラープマンにならって、トマスの「肉体が最早や精神の旺盛なる創造力の重圧に堪え得なく」なっていたといっよいかもかもしれない<sup>66</sup>。

いずれにせよ、この世での最後のときがそう遠くないと悟ったトマスは、近くのフォッサノーヴァにあるシトー会修道院に移りたいと望み、そのとおりに移された。世俗のひとの居城でそのときを迎えることを好まなかったのであろう。トマスは、この修道院の来客用の部屋に迎え入れられたが、暖を絶やしてはなるまいと思った修道士達は暖炉にくべる薪をあり余るほど運び入れたという。それも森に出かけて拾い集め、競い合うように運び入れたという。

このような心づかいにもかかわらず、トマスの体の衰えはさらに重篤となった。やがてトマスは、もっとも大切な旅路の糧を授かるよう願い、それは修道院長テオバルドの手でかなえられた。最後の聖体拝領を受けたのである。一二七四年三月四日のこととされる。その場には、シトー会の修道士ばかりでなく、アニャーニをはじめ、近隣の修道院からやってきた

<sup>65</sup> 引用は、Foster (1959), P. 108 によっている。〔〕内、筆者。

<sup>66</sup> グラープマン (1977), 23頁。

ドミニコ会修道士達、さらにはフランシスコ会の修道士達も集まり、ひざまずいてトマスを見まもったという。そしてそのおり、トマスの語ったとされる言葉が、ゲイのベルナルドゥスやカプアのパルトロメウス、トッコのギレルムス等によって伝えられている。

まず聖体拝領にさいしての慣例にしたがって、「この聖体が<sup>ホスチア</sup>処女<sup>おとめ</sup>マリアから生まれ、十字架にかけられてわれらのために死に、復活した神のまことの御子であることを信じるか」と問われたトマスは、

…… この聖体がまことの神にして人であり、父なる神と処女マリアの御子であることを私は真実に信じ、確実に知っている

と答え<sup>67</sup>、ついでつぎのように語ったという<sup>68</sup>。

わたしの魂のあがないのあたいであるイエス・キリストよ、いまわたしはあなたを受けたまつります。わたしが学び、夜を徹して労苦したのは、すべて、あなたへの愛のためでした。わたしはあなたについて多くを説き、多くを書き著しました。わたしはあなたへの信仰のために説き、書き著してきたのです。[けれども、それらのなかに信仰に背くことや誤りが含まれているなら、]すべてを聖なるローマ教会にゆだね、その判断にまちます。

三日後の一二七四年三月七日早朝、トマスは息をひきとった。

## 結びにかえて

トマスの葬儀はシトー会修道院の大聖堂で行なわれた。シトー会とドミニコ会の修道士達にくわえて、テラチナの司教やフランシスコ会の修道士等の聖職者達、さらには、近隣の平信徒達も参列したという。また、姪のフランチェスカも院長に許可を請うて修道院内に入り、多くの婦人達とともに涙をながしつつ、トマスのために祈ったという。そして、もっともここをゆるしていたにちがいない朋輩ピペルノのレギナルドゥスが、こうした人びとにうながされるように説教壇に立ち、トマスを追悼した。

その説教のなかでレギナルドゥスは、学僧としてトマスがなした思索の結実にはほとんど触れず、ひたすら、その生涯をとおして変わることのなかった謙虚さと清らかさをたたえたという。なが年、身近にいたレギナルドゥスにとってトマスは、なによりもまず、たぐい

<sup>67</sup> Foster (1959), P. 55, 稲垣 (1992), 191頁。引用は稲垣によっている。

<sup>68</sup> 引用はWalz (1951), P. 167によっている。[]内、筆者。なお、引用に際しては、稲垣 (1992), 194-195頁も参考にした。

まれな聖性のひとであったのであろう。

なお、トマスの遺骸は、当初、大聖堂中央祭壇のそばに安置されたが、ドミニコ会修道士によって持ち去られることを怖れたシトー会修道士は、その場所を転々と変えたという。また、トマスの訃報に接したパリ大学人文学部の教授達が連名の書翰をドミニコ会総会に送り、遺骸のパリへの移送を懇願したことは、先に、述べたとおりである。結局、しかし、トマスの遺骸は一三六八年、教皇ウルバヌスV世の命によってトゥールーズに移され、その地のドミニコ会修道院内のサン・ジャコバン教会に埋葬された。

また、遠くケルンにいたにもかかわらずアルベルトゥス・マグヌスは、トマスが息をひきとったのと同じ日、そして同じ刻限に、不意に涙を流しはじめた。まわりにいた聖職者達が怪訝に思い、なぜ、涙を流しているのかと問うたところ、アルベルトゥスは、

イエス・キリストにおけるわたしの息子であり、そして教会の光であったアキノのトマスが死んでしまった

とつぶやいたという。トマスに寄せた評伝におけるグイのベルナルドゥスの証言である<sup>69</sup>。

やがて、トマスを聖人の列にくわえるようもとめる声があがった。

まず声をあげたのは、一二九四年、ローマ管区から独立したドミニコ会のシチリア管区であった。シチリア管区は一三一七年、管区会議を開き、トマスの列聖をもとめたのである。同管区はまた、トッコのギレルムスに列聖の推進者という役割を担うようもとめ、ベネヴェントのロベルト修道士と協力して資料を集めるとともに、列聖の請願書を用意するよう要請した。集められた資料の提示と請願を受けたアヴィニヨンの教皇ヨハネスII世は、ただちに、調査をはじめよう命じ、それに応えて証人調べが一三一九年七月から九月にかけてナポリの大同教館で行なわれた。そこにはドミニコ会とシトー会の修道士をはじめ、四二名もの聖職者と平信徒が出頭してトマスの生涯とその聖性、そしてトマスによってなされた奇蹟について証言したという<sup>70</sup>。奇蹟の数がすくないという異論もあったとされるが、当初からトマスの列聖に理解を示していたヨハネスII世はそうした異論を斥けた。それに向き合い、神学上の、あるいは哲学上の解答を与えた問の数だけ、トマスは奇蹟を行なったのだと述べて。ついでヨハネスII世は一三二三年六月、枢機卿会議を招集してトマスの列聖の可否を諮り、可とする判断を得た。

こうして列聖のための調査や手続きが完了したのは一三二三年七月のこと、そして同月

<sup>69</sup> 引用は、Foster (1959), P. 58 によっている。

<sup>70</sup> 証人調べは一三二一年一〇月、フォッサノーヴァのシトー会修道院でも行なわれたという。

一八日、トマスは教会の聖人であることが公式に宣言された。宣言はアヴィニヨンのノートルダム・デ・ドム教会においてなされたという。また、祝日は三月七日とされた。

なお、一八七九年八月四日、教皇レオXIII世は回勅〈アエテルニ・パトリス (*Aeterni Patris*)〉を公布し、すべてのキリスト教徒につきのように呼びかけた。すなわち、これまで散在していた遠い以前からの聖なる博士達の教えを、トマスは、

集めて固め、秩序立て、さらに重要な追加をした。こうしてトマスはカトリック信仰の特別のとりでとみなされている。……カトリック信仰の保全と栄光のため、世の人びとの利益のため、そしてすべての学問の深化のため、聖トマスのすばらしい英知をよみがえらせ、なしうるかぎり広める

よう呼びかけたのである<sup>71</sup>。

もちろん、トマスが息をひきとった後、この回勅までの六世紀あまりの間、トマスが忘れ去られていたわけではない。トマスの学知はさまざまに吟味され、批判にさらされた。批判に反駁する試みもなされた。けれども、この呼びかけに応えるように、あらたな学院や講座が欧州のいくつもの大学に創設されて、トマスの知的構築物についての研究をうながした。また、信頼しうるテキストによる新たな全集の刊行も着手された。『レオ版』と呼ばれ、そうした研究を支えるもっとも基本的な文献とみなされている全集である。

レオXIII世の回勅が、〈トマス復興〉のはじまりを告げるものといわれる所為である。

さて、こうしてみるとトマスの生涯は、波風の激しい大海原に、ひとり漕ぎ出さねばならなかった航海者のそれのようであったと思われる。トマスを導き、教え、支えたひと達がいた。サン・ジュリアーノのヨハネス神父、アルベルトゥス・マグヌス、そしてピペルノのレギナルドゥスである。けれども、結局のところトマスはひとり大海原に出なければならなかった。なるほどトマスは、多くの日々を修道院の外界から隔絶された静けさのなかで過ごしたが、しかし、それはけっしてその静けさにふさわしい静謐な日々ではなかった。パリの、あるいはナポリのドミニコ会修道院の僧房にあって、ひたむきに、しかし淡々と思索と執筆だけに没頭することのできた生涯、静謐な生涯ではなかったのである。むしろ、大波のようにつぎつぎにおしよせてくる攻撃や放たれてくる批判に翻弄されながら、それらの前にひとり立ちはだかりつづけねばならない生涯であった。そのうえ、教会や修道会からは、さまざまの重荷を背負うようもとめられ、それに応えつづけねばならない生涯でもあった。そうしたなかで、イエス・キリストの福音を読み解き、よりよく民衆に語り伝えるべく、観想と思

<sup>71</sup> 引用は、デインツィンガー (1982)、469頁によっている。

索を深め、あの、比肩するものがないといってよいほどに巨大な、しかも堅牢な知的構築物を築き上げたのである。筆者にとってそれは驚きであり、信じがたいというほかない。

そのようなトマスに向き合い、その知的構築物のほんの一端にでも触れることができるなら、筆者には、おおきなよろこびである。章を改めてこころみてみたい。そしてそのなかで、トマスのふところの深さとおおらかさを、感覚にうったえる仕方ではなく、しっかりと掘り下げられた論として書き継いでいきたい。はなはだ無謀なこころみであると承知しつつ。

(成蹊大学名誉教授)

### 引用・参考文献

- アクィナス、トマス『神学大全 第四冊』、高田 三郎、日下 昭夫訳、創文社、1973。  
——『神学大全 第二四冊』、竹島 幸一、田中 峰雄訳、創文社、1996。  
——『神学大全 第四五冊』、稲垣 良典訳、創文社、2007。  
稲垣 良典 (1992)『トマス・アクィナス』、清水書院。  
グループマン、M. (1977)『聖トマス・アクィナス:その思想と生涯』、高桑 純夫訳、長崎書店。  
ダンテ・アリギエーリ『神曲』、平川 祐弘訳、ギュスターヴ・ドレ画、河出書房新社、2010。  
チェスタトン、G. K. (1976)『聖トマス・アクィナス』(『G・K・チェスタトン著作集 6 久遠の聖者』)、生地 竹郎訳、春秋社。  
ディンツィンガー、H.編、シェーンメッツァー、A.増補改訂(1982)『カトリック教会文書資料集』、ジンマーマン、A.監修、浜 寛五郎訳、エンデルレ書店。  
西藤 洋 (2012)『枢機卿ベッラルミーノの手紙:科学思想史への一つの扉』、未来社、2012。  
——(2015)『神からの借財人コジモ・デ・メディチ:十五世紀フィレンツェにおける一事業家の成功と罪』、法政大学出版局、2015。  
Aquinas, Thomas, *On Being and Essence*, Maurer, A. trans., Toronto: The Pontifical Institute of Medieval Studies, 1968.  
Foster, K. (1959), *The Life of Saint Thomas Aquinas: Biographical Documents*, London: Longman, Green and Co..  
Tanner, N. P. ed., *Decrees of the ecumenical councils I, II*, London : Sheed & Ward, 1990.  
Walz, A. (1951), *Saint Thomas Aquinas: A Biographical Study*, Bullough, S. trans., Westminster, Maryland: Newman Press.